

佐倉印西線(緊急地方道路整備) 埋蔵文化財調査報告書 2

— 佐倉市岩名古墳群 —

平成17年3月

千葉県県土整備部
財団法人 千葉県文化財センター

佐倉印西線(緊急地方道路整備) 埋蔵文化財調査報告書 2

— さくらし いわな こかんぐん —
佐倉市岩名古墳群





岩名 4 号墳

最上段 墓丘断面（北から）
左上 中央施設出土白玉
土器棺出土ガラス玉
右上 墓丘下土器棺



岩名 5 号墳
左 石棺の裏込石
下 墓丘断面（北西から）



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第520集として、千葉県県土整備部の佐倉印西線緊急地方道路整備事業に伴って実施した佐倉市岩名古墳群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳2基及び関連する遺構・遺物が見つかり、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また、地域の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際しご指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成17年3月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 清水新次

凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部（旧・土木部）による佐倉印西線（緊急地方道路整備）事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、佐倉市下根955番地の1ほかに所在する岩名町前遺跡（遺跡コード212-042）地内の岩名4号墳と、佐倉市岩名954番地の1に所在する岩名5号墳（遺跡コード212-045）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部（旧・土木部）の委託を受け、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査と整理作業の実施期間及び担当者は第1章に記述した。
- 5 本書の執筆は、第2章第3節を古内茂、そのほかを田中裕が担当し、編集は田中が行った。
- 6 本文中の石器石材については、有限会社考古石材研究所の柴田徹氏に鑑定を依頼し、これに基づいて記載した。また、ガラス玉の材質については、有限会社武藏野文化財修復研究所の小泉好延氏に分析と原稿を委託し、成果報告を付章として掲載した。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育厅教育振興部文化課（旧・生涯学習部文化課）、千葉県県土整備部印旛地区整備センター（旧・土木部印旛土木事務所）、佐倉市教育委員会の御指導と御協力を得た。また、調査及び報告書作成中には以下の方々の助言を賜った。記して感謝の意を表す。石橋充、猪股佳二、酒井弘志、白石太一郎、日高慎、広瀬和雄、吉澤悟（五十音順・敬称略）
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第2図 佐倉市都市計画図 1/2,500
- 第3図 国土地理院発行 1/25,000「佐倉」（平成10年6月）・「小林」（平成10年12月）
- 9 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による平成14年撮影1/10,000のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方針は、旧公共座標の日本測地系（国家標準直角座標第IX系）における座標北である。
- 11 遺物の色調について、土器等に関しては財團法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』に準拠し、玉類等に関しては同じく『改訂版 色名小事典』に準拠した。
- 12 本書に使用したスクリーントーンや点の種類については各図に内訳を示した。赤彩遺物については遺物実測図に赤彩範囲を赤色で示した。また、須恵器は断面を墨塗り、陶磁器は断面を墨の網掛けとした。

本文目次

第1章 はじめに	1	
第1節 調査の概要	1	
1 調査の経緯と経過	1	
2 調査の方法	2	
第2節 遺跡の位置と環境	2	
1 遺跡の位置と周辺の地形	2	
2 周辺の遺跡	4	
第2章 検出された遺構と遺物	8	
第1節 岩名4号墳	8	
1 現況	8	
2 古墳の墳丘と埋葬施設	11	
3 塚	21	
第2節 岩名5号墳	23	
1 現況	23	
2 古墳の墳丘と埋葬施設	23	
3 塚	32	
第3節 盛土及び旧表土の遺物	36	
1 石器	36	
2 繩文土器・弥生土器	39	
第3章まとめ	41	
第1節 岩名古墳群の墳丘	41	
第2節 岩名古墳群における埋葬施設	43	
1 木棺と土坑墓	43	
2 石棺をめぐる問題	43	
3 土器棺をめぐる問題	45	
第3節 岩名古墳群の副葬品	46	
1 白玉・ガラス小玉	46	
2 鉄鎌	47	
第4節 総括	48	
付表	50	
付章 岩名4号墳出土ガラス玉材質分析	(有)武藏野文化財修復研究所 小泉好延	53
写真図版		
報告書抄録	卷末	

挿図目次

第1図 グリッド配置	2	第17図 岩名5号墳石棺	30
第2図 岩名古墳群の分布と地形	3	第18図 岩名5号墳墳丘・周溝出土遺物	32
第3図 周辺の遺跡	5	第19図 岩名5号墳墳頂部及び石棺出土鉄製品	33
第4図 岩名4号墳・5号墳遺構配置	6	第20図 墳頂部塚施設（5号墳）	34
第5図 岩名4号墳の墳丘（調査前）と 近世遺構	8	第21図 塚関連遺物（5号墳）	34
第6図 岩名4号墳墳丘断面	9	第22図 岩名5号墳周辺の近世土坑	35
第7図 岩名4号墳の墳丘（調査後）	13	第23図 岩名4号墳・5号墳周辺出土の石器 (1)	37
第8図 岩名4号墳墳丘・周溝出土土器	14	第24図 岩名4号墳・5号墳周辺出土の石器 (2)	38
第9図 岩名4号墳中央施設と副葬品	16	第25図 岩名4号墳・5号墳墳丘出土繩文土器	39
第10図 岩名4号墳周溝内施設	17	第26図 弥生土器	40
第11図 岩名4号墳墳丘下土器棺出土状況	19	第27図 岩名古墳群の調査成果	42
第12図 岩名4号墳墳丘下土器棺出土遺物	20	第28図 石棺の幅年観	44
第13図 塚・豊坑内出土遺物（4号墳）	22	第29図 千葉県における古墳時代前期の土器棺	45
第14図 岩名5号墳の墳丘（調査前）	24	第30図 房縁の長頸縫と伴出土器（抜粋）	47
第15図 岩名5号墳墳丘断面	25		
第16図 岩名5号墳の墳丘（調査後）	28		

表目次

第1表 土器観察表	50	第3表 玉類計測表	51
第2表 金属製品計測表	50	第4表 繩文土器観察表	51

図版目次

巻頭	岩名4号墳墳丘断面（北から）	岩名4号墳調査前（東から）
	岩名4号墳中央施設・土器棺の玉類	図版3 岩名4号墳全景（南西から）
	岩名4号墳墳丘下土器棺	岩名4号墳全景（上から）
	岩名5号墳石棺の裏込石	岩名町前遺跡完掘状況（上から）
	岩名5号墳墳丘断面（北西から）	図版4 岩名4号墳墳丘断面（北から）
図版1	航空写真	岩名4号墳墳丘断面（南から）
図版2	岩名4号墳・5号墳遠景（鹿島川から）	岩名4号墳墳丘断面（西から）
	岩名4号墳調査前（西から）	岩名4号墳南側の高まり断面（西から）

図版 5	岩名 4 号墳北側周溝断面（西から） 岩名 4 号墳西側周溝断面（北から） 岩名 4 号墳東側周溝断面（北から） 岩名 4 号墳東側周溝内出土遺物（東から） 方形周溝状遺構遺物出土状況（南から）	岩名 5 号墳墳丘東側及び南側断面 (北西から) 岩名 5 号墳 C-C'断面（南西から） 岩名 5 号墳頂覆土除去状況（北西から） 墳頂供獻土器・鉄器出土状況（南東から）
図版 6	岩名 4 号墳中央施設（上から） 岩名 4 号墳中央施設断面（西から） 岩名 4 号墳周溝内施設（南から） 岩名 4 号墳周溝内施設断面（東から）	岩名 5 号墳と埋葬施設（上から） 石棺盗掘坑内完掘状況（東から） 石棺盗掘坑内断面（東から） 石棺と裏込（東から）
図版 7	岩名 4 号墳墳丘下土器棺（北から） 岩名 4 号墳転用塚頂部断面（西から） 岩名 4 号墳転用塚竪坑断面（西から） 岩名 4 号墳転用塚竪坑内出土遺物（北から）	近世の道（西から） SK019（北東から） 近世土坑全景（上から） SK001（上から）
図版 8	岩名 5 号墳（鹿島川から） 岩名 5 号墳調査前（北西から） 岩名 5 号墳覆土除去状況（北西から）	SK002（北東から） 図版13 岩名古墳群出土土器（1） 図版14 岩名古墳群出土土器（2）
図版 9	岩名 5 号墳全景（北の上方から） 岩名 5 号墳墳丘（北北西から） 岩名 5 号墳墳丘盛土断面（北から）	図版15 岩名古墳群出土土器（3） 図版16 岩名 5 号墳出土金属製品 図版17 岩名古墳群出土繩文土器・弥生土器
図版10	岩名 5 号墳墳丘北側及び西側断面 (北西から)	図版18 岩名古墳群出土石器

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県土木部（平成16年度より県土整備部）は、佐倉印西線道路の緊急地方道路整備事業に伴い、佐倉市下根955番地の1ほかについて、路線内における埋蔵文化財の所在の有無を千葉県教育委員会に照会したところ、当該地区が岩名4号墳を含む岩名町前遺跡の範囲に含まれることが確認された。また、隣接地の佐倉市岩名大作954番地の1についても、古墳1基（岩名5号墳）の存在が確認された。これを受け、千葉県教育委員会と千葉県土木部は遺跡の取扱いについて協議した。その結果、発掘調査を行って記録保存の措置を講じることとなり、財團法人千葉県文化財センターが発掘調査を受託して実施することとなった。

上記の調査成果のうち、岩名町前遺跡に関しては、岩名4号墳を除く集落遺跡の部分についての報告書を平成16年3月に刊行し、すでに公表したところである¹⁾。本書では前巻で未報告であった岩名4号墳と、岩名5号墳の調査成果について、岩名古墳群の報告書としてまとめて収録するものである。

本書収録分に関する発掘調査の対象面積、組織及び担当職員は下記のとおりである。役職名は、当時のものである。

平成12年度 岩名町前遺跡の発掘

期 間：平成12年7月1日から平成12年10月31日

組 織：北部調査事務所長 石田廣美

担当 副所長 石倉亮治

内 容：(規模) 3,800m² (確認調査) 上層 380m²/3,800m² 下層 76m²/3,800m²

(本調査) 上層 1,584m²

平成14年度 岩名5号墳の発掘

期 間：平成14年7月1日から平成14年9月30日

組 織：北部調査事務所長 古内 茂

担当 研究員 田中 裕

内 容：(規模) 844m² (本調査) 上層 844m²

平成16年度 岩名古墳群の整理（報告書刊行まで）

期 間：平成16年8月1日から平成17年3月31日

組 織：北部調査事務所長 古内 茂

担当 上席研究員 柳原弘二、森本和男、矢本節朗



第1図 グリッド配置

2 調査の方法

発掘区の設定は両遺跡とも共通のものとし、旧公共座標である日本測地系（国家標準直角座標第IX系）に基づき、 $20m \times 20m$ で大グリッドをつくり、西から東へA・B・C…、北から南へ1・2・3…と名付け、組み合わせて呼称した。

大グリッドは、さらに小グリッドに分割した。岩名町前遺跡（岩名4号墳）では $4m \times 4m$ の25分割方式で、西から東へ00・01…04まで、北から南へ00・10…40まで、5段5列の区分けにより名付けた。したがって、小グリッド名は大グリッドの中に00から44まであり、C6-00・B5-44のように呼ぶこととした。

岩名5号墳は $2m \times 2m$ の100分割方式で小グリッドを区分けし、西から東へ00・01…09、北から南へ00・10…90まで、10段10列で名付けた。したがって、小グリッド名は大グリッドの中に00から99まであり、E11-00・D10-99のように呼ぶこととした。

調査中に新座標である世界測地系（JGD2000系）が示された。基準点網図の一基点である11E-00は旧座標で（X=-29,560.00000, Y=35,280.00000）、新座標で（X=-29,204,91430, Y=34,986,32380）である。

遺構名は番号の前に、竪穴住居跡にSI、土坑にSK、溝にSD、岩名町前遺跡のみ古墳にSMを冠したものを調査時に使用し、遺物の注記においても調査時と同じ名称である。しかし、岩名町前遺跡の既刊行報告書において遺構名に変更が加えられたため、本報告においても名称を既刊行報告書に準じるものに変更し、調査時名称は（）内に併記した。なお、古墳群関連遺構に関しては既刊行報告分であっても、関係が明確になるよう一部重複して掲載したものがある。

遺物注記は、遺跡コード、遺構名、遺物台帳に記載された遺物番号（注記番号）を、順に書き込んだ。注記の際、遺構名とグリッド名は同じ扱いとした。鉄器の実測はX線写真撮影を経て行った。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺の地形

岩名古墳群の所在する佐倉市は、千葉県北部のほぼ中央に位置する。市域は印旛沼の南岸を占め、樹枝状の支谷が複雑に入り込む「下総台地」が広がる。「W」字形をなす印旛沼の屈曲部には、半島状に台地が張り出している。その一つ、岩名・飯野・土浮にかけての半島は、南北延（現：鹿島川低地沿い）が直



第2図 岩名古墳群の分布と地形

線的な地形であるのに対し、北東辺（現：印旛沼中央排水路沿い）が複雑に支谷が入る地形で、北東辺から入った支谷の最奥部は、南西辺の直前まで深く刻み込んでいる。岩名古墳群はこの深い支谷と鹿島川低地との間にからうじて残った細い陸狭部に立地する。

印旛沼に注ぐ鹿島川河口付近は標高2.5m、古墳が所在するその右岸台地上は標高27m前後で、台地から南を望むと、かつて印旛沼の湖面であり、近代の干拓により水田化された鹿島川低地を遙か南方まで一望できる。現在は、北進してきた鹿島川が高崎川と合流し、この半島にぶつかって西に屈曲する地点に当たり、水田に向かって左手台地上には、国立歴史民俗博物館が所在する近世の佐倉城跡を周辺に望むことができる。

2 周辺の遺跡

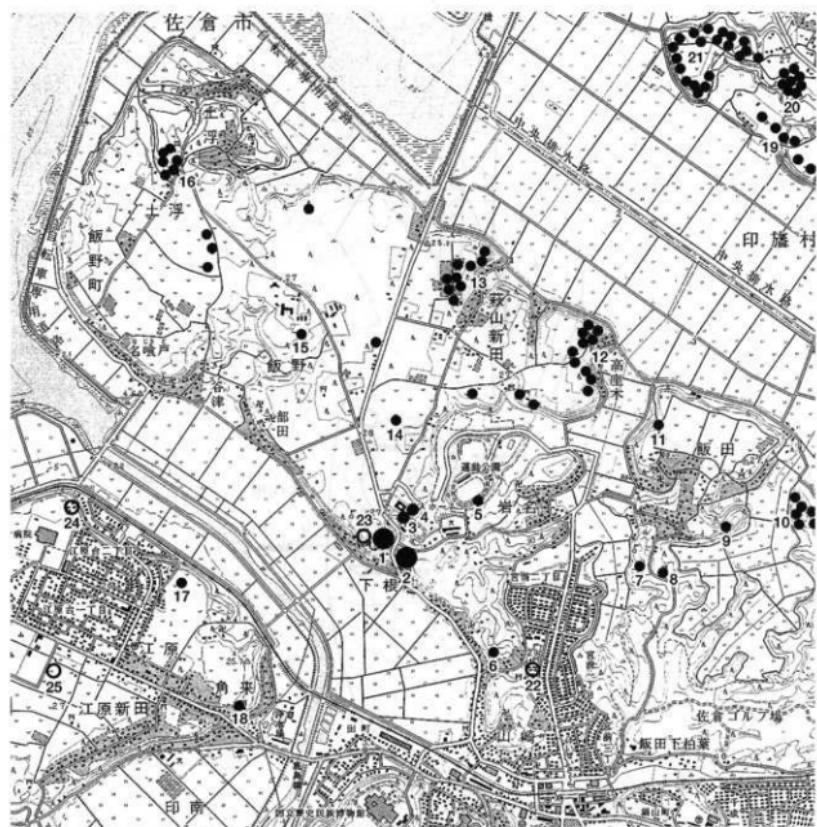
岩名古墳群は現在5基が確認されている。岩名1号墳は昭和47（1972）年に現在の岩名運動公園の造成に伴い調査が行われたが、報告書未刊行のため詳細は不明である。外径約12mの隅円方形に近い円墳であるという²⁾。岩名2号墳・3号墳は平成11（1999）年に財団法人印旛郡市文化財センターにより調査が行われ、報告書が刊行されている³⁾。両古墳は岩名4号墳の北東わずか100m地点、小支谷（現：県道）を挟んですぐ向かい側に位置する。このうち、2号墳は24m×22m⁴⁾の方墳で、高さ約3.1m（盛土高1.6m）の比較的高い墳丘を有する。埋葬施設として、墳丘のやや東寄りに検出された長方形の深い土坑が認識されている。周溝から、土師器壺と短脚の屈折脚高杯等が出土している。3号墳は一辺14mの方墳で、高さ約1.6m（盛土高0.6m）の低い墳丘を有する。埋葬施設は墳頂部中央に箱形木棺を直葬したとみられる。埋葬施設内部から滑石製白玉64点、ガラス小玉2点が出土している。また、周溝から土師器壺、小型丸底壺、屈折脚高杯等が出土している。2号墳・3号墳とも古墳時代中期前半に築造されたと報告されている。

岩名古墳群の周辺は決して古墳が多い地域ではなく、小型の古墳が散見される程度で、古墳群としても基數は少ない。墳丘長50m以上の古墳では、印旛沼沿岸がほとんど空白地帯であり、岩名から直線距離で8km～11km離れた印旛沼東岸地域（成田市公津古墳群、栄町竜角寺古墳群）に限定される。

佐倉市内で最も近くに所在する比較的大型の古墳は、山崎ひょうたん塚古墳である。岩名古墳群の南東約1km地点の、岩名5号墳と同じ一連の台地上に位置する。墳丘長約37mの前方後円墳で、中期古墳とされるが詳細は不明である⁵⁾。

岩名古墳群が面するのと同じ小支谷の河口（北東1.3kmほどの印旛沼中央排水路付近）には、円墳24基からなる萩山古墳群がある。萩山11号墳は箱形石棺から直刀・鉄鎌が出土している。また、印旛沼に面した半島の突端には土浮古墳群、中央排水路側の半島付け根には下新闘古墳群などが分布する。

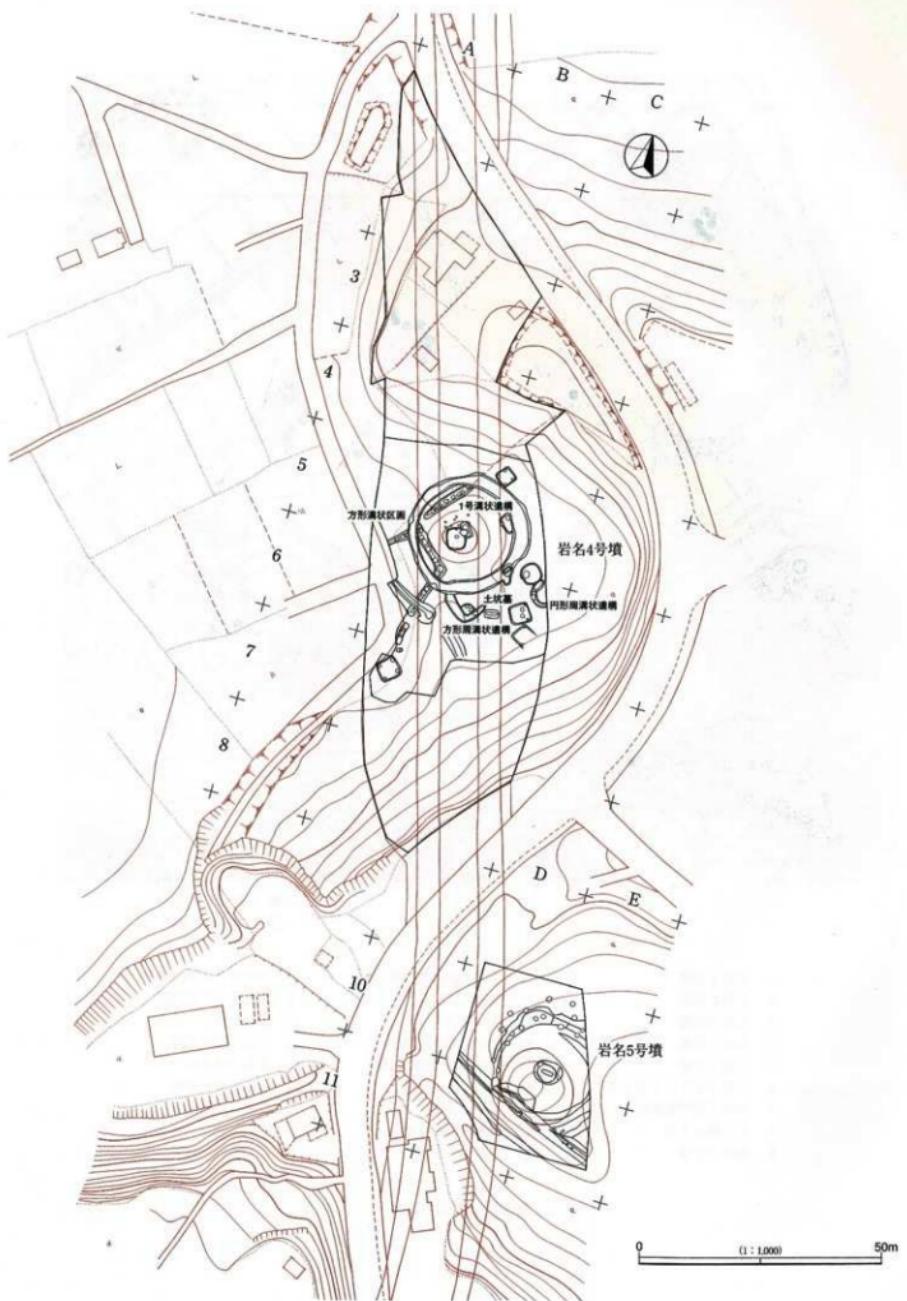
古墳のほか、鹿島川と高崎川の沿岸台地上は、弥生時代の遺跡が集中的に多く分布していることで知られる。このうち鹿島川下流域において、本遺跡に最も近い位置に所在する岩名天神前遺跡は、弥生時代中期の集落跡である。入江を挟んで対岸の佐倉城跡は、弥生時代の遺跡としても知られている。鹿島川を挟んで対岸に位置する江原台遺跡では弥生時代後期の集落跡と方形周溝墓、曲輪ノ内遺跡では集落跡が検出されている。これらと関連するように、岩名4号墳とともに調査された岩名町前遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期までの集落遺跡が検出されている。弥生時代後期の竪穴住居跡3軒、弥生時代末から古墳時代前期までの竪穴住居跡5軒などとともに、方形周溝墓1基等も報告されている。



● 古墳
○ その他の遺跡

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| 1 岩名 4号墳 | 10 飯田下新聞古墳群 | 19 平賀古井戸原古墳群 |
| 2 岩名 5号墳 | 11 飯田 1号墳 | 20 平賀山ノ下古墳群 |
| 3 岩名 3号墳 | 12 萩山古墳群 | 21 勉堂遺跡 |
| 4 岩名 2号墳 | 13 萩山新田中芝遺跡 | 22 岩名天神前遺跡 |
| 5 岩名 1号墳 | 14 萩山新田大久保遺跡 | 23 岩名町前遺跡 |
| 6 山崎ひょうたん塚古墳 | 15 飯野中尾余古墳 | 24 江原台第1遺跡 |
| 7 飯田下木戸脇古墳 | 16 土浮古墳群 | 25 曲輪ノ内遺跡 |
| 8 飯田柳田古墳 | 17 角来駒形 1号墳 | |
| 9 飯田 2号墳 | 18 角来坂 1号墳 | |

第3図 周辺の遺跡



第4図 岩名4号墳・5号墳遺構配置

- 注1 石倉亮治 2004 「佐倉印西線（緊急地方道路整備）埋蔵文化財調査報告書－佐倉市岩名町前遺跡－」 財団法人千葉県文化財センター
- 2 酒井弘志 2001 「千葉県佐倉市岩名古墳群（2号墳・3号墳）－老人福祉施設設置に伴う埋蔵文化財調査－」 財団法人印旛都市文化財センター
- 3 同上
- 4 墳丘長とは、周溝底の内側における傾斜変換線を墳裾として計測した、主軸の長さをいう。報告書によってはこの値が示されないことがあるため、測量図から計り直した値が報告書の記載と異なる場合がある。
- 5 佐倉市教育委員会 1976 「文化財時報」 5

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 岩名4号墳

1 現況



第5図 岩名4号墳の墳丘（調査前）と近世遺構

岩名4号墳（SM001）は、南西に鹿島川低地が接する台地に立地するが、直接に鹿島川低地を見下ろす台地縁ではなく、むしろ反対側（北東）の印旛沼（中央排水路）から台地を遮ぎるように入ってきた大支谷の末端に面している。付近の台地は標高29m前後であり、本古墳は東側の支谷に向かって突出し緩やかに傾斜する標高28m前後の地点に位置する。本古墳と岩名5号墳は互いによく見えるが、5号墳が作られた台地陸続部よりも本古墳の立地は4m～5mほど標高が高い。

付近は畠地と山林等であったが、本古墳のすぐ北側は1mほど低く削平され、支谷の奥部に土を押し出して平地に造成されており、そこには民家が建てられていた。また、南東側の岩名5号墳に向かう陸続部は、墳丘への直接的影響はないが、県道による切通しで切断され、旧地形が失われている。

高い墳丘が残っていたことから、発掘調査に先立ち測量調査を行った。第5図は発掘調査前の測量図（等高線間隔：10cm）である。現況を理解するため、中・近世造構の調査結果（太線）と古墳周溝の位置（細線）を赤版で重ねている。その結果、高さ2.3m～2.6m、一辺約16mのほぼ正方形（二辺の向きがN45度W）であることが判明した。調査前には塚であることが想定されていたが、このように墳丘が大きいことから古墳の可能性が考慮され、また調査者は南東側にみられる高さ20cmほどの平らな段を前方部とする前方後円墳の可能性も考慮に入れて調査を進めた。

発掘の結果、もともと低墳丘の円墳が、中・近世に方形の塚としてさらに高く盛り直され、再整形されていることが判明した。以下、墳丘の状態及び再整形の痕跡について詳細を記す。

2 古墳の墳丘と埋葬施設

（1）墳丘と周溝

墳丘面

古墳は塚の構築に伴って裾部が直線的に削り取られ、塚の裾部に沿って地境溝とみられる溝が走る。墳丘は高く改変されている。この状況は墳丘断面によく表れている（第6図）。

調査時には塚による大幅な改変を想定しておらず、中・近世造構と古墳本来の墳丘面が識別されないまま調査が進んだため、墳丘断面実測時に近世溝が未検出であるなどの矛盾点を含むが、断面図は基本的に現地観察を尊重して示している。イ～ヨ層は地境溝の掘込みとその覆土に対応する上層である。塚構築後の近世～現代のものとみられる。つぎに、1～34層が古墳築造以後から塚に再整形されるまでの土層である。これには塚の施設（1層）、塚の再構築土（2～25層）、古墳周溝覆土（26～34層）が含まれる。つぎに、a～j層が古墳の墳丘盛土である。

古墳の墳丘面は、a層の上面である。断面を観察する限り、a層より下と、18～20層より上では明らかに積み方が異なっている。a層とc層は大型のロームブロックを板めて多量に含むが分層は難しく、基本的に30cm～50cmという大きな単位で、ほぼ同じ土質の盛土が一挙に積み上げられ、一層当たりが厚く堆積する。一方、2～25層は5cm～15cmの薄さで、ほぼ水平に何層にも細かく分けて載せられ、版築のようにみえるが、下位境界の18～20層を除くとあまり固くはない。したがって、標高29.5m付近のa層上面が、古墳の墳丘と塚の境界である可能性が高い。このとき、この面が古墳本来の墳丘面であるか、一度削平して再整形したかの問題が残る。これに関しては、後に述べる中央施設の植底が、旧表土に食い込むほど低い位置であることから、本来の墳丘面に近いと考える。

以上の墳丘面に関わる土層観察結果は、遺物出土位置から裏付けられる。第7図の平安時代遺物（▲）

と中・近世遺物（△）の出土位置に注目すると、1～25層の施設内と塚再構築土、イ～ヨ層の塚以後の覆土から出土している。とくに平安時代遺物である9が、ちょうどa層上面くらいの高さから出土している。墳丘の比較的中央部に近い位置で出土しているので、混入とは判断しがたく、平安時代に墳丘上で何らかの行為があった可能性を示唆する。中世遺物である12もa層より上位、再構築土の比較的低位から出土している。これらは、平安時代～中世のころに墳丘がa層上面くらいの高さであったことを示す。

墳形と規模（第7図）

墳丘面を検討した結果、岩名4号墳の墳形と墳丘規模は以下のとおりと判断される。

・墳丘の形態 円墳

・墳丘の規模 墳丘長（直径）21m、墳丘高2.0m（西）～2.4m（東）

墳頂平坦面は標高29.5m前後で、断面から復原される平坦面の直径は7m～10mである。墳裾は東側周溝内で標高27.06mである。改変が著しく、段築の有無は確認できないが、低墳丘で広い平坦面が想定されることから、無段築の可能性が高い。このときの傾斜面は傾斜角20度～25度とみられる。

周溝は、深さ0.4m（西側）～0.55m（東側）、確認面での幅は1.8m（西側）～3.7m（東側）であり、外周はやや歪はあるがほぼ相似形である。周溝外周を含めた総長（全長）は約26mである。西側と東側の深さや幅の違いは塚に伴う溝を境に生じており、西側が中・近世に削平されたことに由来する。西側の墳裾付近は少なくとも30cm以上は低く削平されている。したがって、本来は同じ幅か、標高の高い西側の方がむしろ深くて広い周溝であった可能性がある。

周溝内部の覆土にはとくに人為的な痕跡が認められず、自然な埋没とみられる。

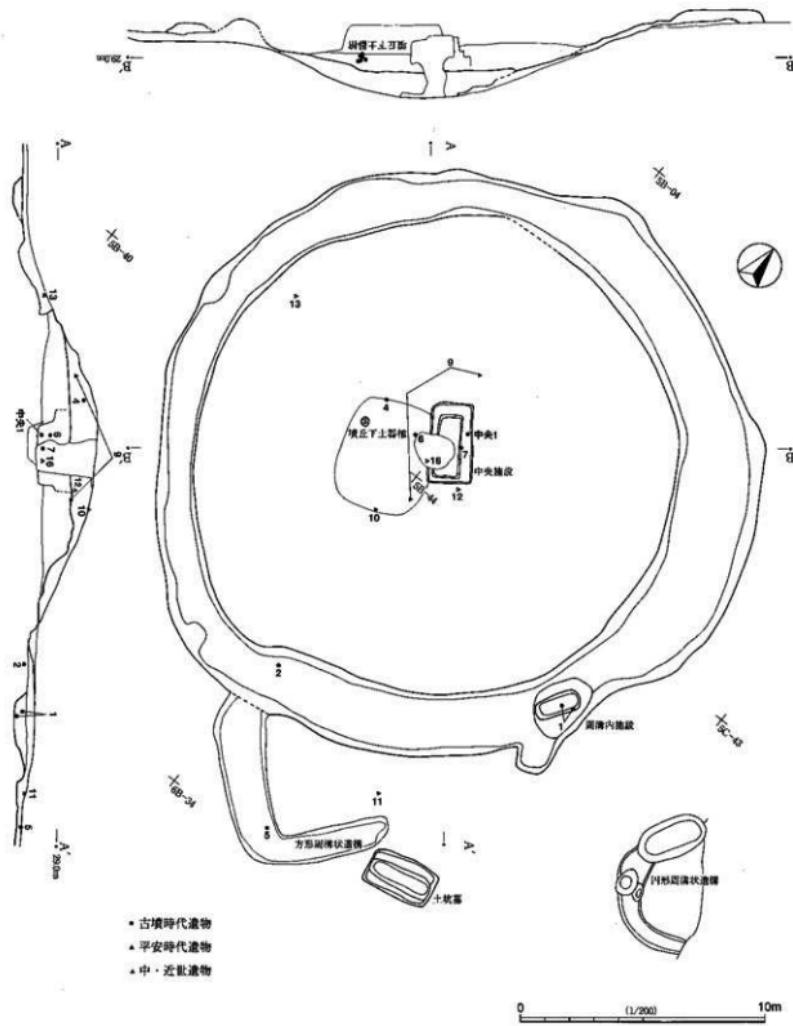
標高28.9m～28.4mに旧地表が検出される。西側の標高が高く、支谷に面した東に向かって50cmほど傾斜している。旧地表には、古墳に先立って弥生時代後期の堅穴住居跡（8号住居跡：SI008）が営まれているなど識別がやや難しい複雑な状況があった。旧地表から上の盛土は0.7mから1.1m前後であり、一方、周溝底までの1.2m～1.3mは地山である。

盛土は単純で、土の種類を使い分けて交互に積む工夫などは認められない。土のしまりも決して固くなく、突き固めた事実は確認できない。

墳丘・周溝出土遺物（第8図）

本古墳からは14.6kg（土器棺8.2kgを除く）の弥生土器と土師器片が出土している。大部分は墳丘内に含まれた古式土師器の壺小片で、土器量は多いが接合する破片は少なく、遺存度は低い。これらは古墳築造以前の遺構等から混入した遺物の可能性が高い。墳丘上部や周辺削平部では、塚への再構築時とそれ以後に混入した遺物が散見される。これらの遺物を合わせて、特徴的なものを第8図に示した。

古墳に伴う遺物は少ないが、周溝から出土した1・2が、本古墳に直接関係する遺物とみられる。1は南東側周溝において、周溝内施設の上から出土した土師器杯である。丸底の須恵器蓋模倣杯とみられる。外面に明瞭な棱をもち、口縁部はヨコナデ、稜から下部はヘラケグリ、内面にはヘラナデが施される。明褐色で、底部に明瞭な黒斑を有し、口縁部のみ赤彩が施される。胎土に細かい砂粒を多く含む。鬼高式の古相を示す。2は須恵器甕である。口縁部と頸部の小片が2点あり、わずかに接点がある。白っぽい硬質の焼成で、内面の一部にオリーブ緑色の自然釉がかかる。口縁端部は鋭く面が作られ、段の後も明瞭である。頸部には御波文が施される。13齒以上の工具であるが、上部の8齒～9齒分のみ明瞭である。黒色微細粒子を含む緻密な胎土と焼成から東海産須恵器とみられる。やや開き気味であるが短い頸部でありⅠ期



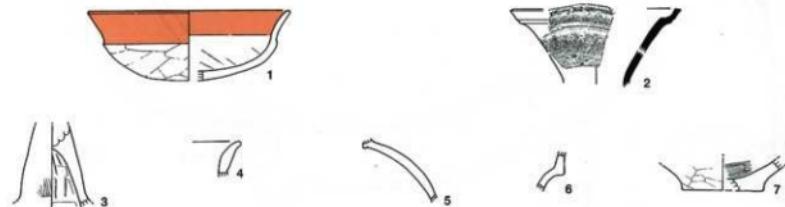
第7図 岩名4号墳の墳丘（調査後）

最新相とみられる。直接比較はできないが田辺編年TK-23~TK-47型式併行期の所産とみられる。

3~7は古墳時代遺物である。3・4は塚再構築土内から出土した。3は和泉式の高杯脚部である。エンタシスをもち、外面は縦方向のミガキ、内面はヘラケズリが施され、明褐色であるが赤彩された可能性がある。4は和泉式ないし鬼高式の甕口縁部小片である。厚手で丸みを帯びるが口縁端部は比較的鋭い。明褐色である。外面にわずかなハケの痕跡を残し、ヨコナデが施される。5は前回報告分に「方形周溝状遺構」と報告された、重複する周溝覆土から出土した。五領式の壺の肩部片である。ナデを基調とし、暗褐色、外面にわずかに煤状付着物がみられる。6・7は中央施設付近で出土した。6は五領式の有段口縁壺小片とみられる。暗褐色で強いヨコナデが観察される。7は五領式の平底甕底部片である。外面ヘラケズリ、内面に8本/cmの明瞭なハケが施され、激しい二次被熱により外面赤色化、内面黒色化が進む。

8~11は平安時代遺物である。8~10が塚再構築土から出土したロクロ製土師器杯である。8は墳丘東側で出土した同一個体とみられる口縁部と底部の破片である。いずれも明褐色~淡い黄褐色であり、8・9はロクロ目がナデにより消され、底面は手持ちヘラケズリ、10は底部を回転糸切りの後ドーナツ状回転ヘラケズリ、内面にミガキが施される。11は古墳の南東側周溝付近で出土した内黒の土師器椀である。ロクロ製で、淡い黄褐色であり、内面に丁寧なミガキを伴う黒色処理が施される。底部に比較的先端部が細い高台がつく。

12・13は中・近世遺物である。12は塚構築土から出土した瓦質の擂鉢とみられる。焼成はよいが土師質であり、外面に斜め方向の皺があり、粘土継ぎ目や捏ね目が残るが、全体にヨコナデが加えられる。口縁



古墳時代土器



平安時代土器



中・近世土器

0 10cm
1/40

第8図 岩名4号墳丘・周溝出土土器

部はヨコナデが施され、鋭い面が作られる。明褐色で、黒斑はなく、煤状付着物もない。中世の所産とみられる。13は内耳の焰烙片である。塚を直線的に掘り込んだ溝上部付近から出土している。厚い口縁部、薄い底面部に分かれ、口縁端部は丸く、強いヨコナデが施される。激しい二次被熱を受け、口縁部を中心と煤状付着物に覆われる。近世の所産である。

(2) 埋葬施設と副葬品

埋葬施設は3か所検出されている。円墳のほぼ中心部に當まれた中央施設、西寄りの墳丘下部に検出された土器棺、南東側の周溝内部に掘り込まれた周溝内施設の3基である。このほか、周溝の外側：南南東4mの位置に埋葬施設がもう1基あるが、これはすでに報告済みである（土坑墓1：SD002）。このうち、土器棺は本古墳との関係において判断が難しい施設であるため後述することとし、ここでは本古墳に伴うことが確実な、中央施設と周溝内施設を報告する。

中央施設（SM001-003、第9図）

円墳の中心位置には、木棺を納めたとみられる埋葬施設が検出されている。位置と構造から、この中央施設が本古墳の一義的な埋葬施設とみられる。

・棺の形状 箱形木棺（推定）

・棺の規模 長さ約1.7m、幅0.95m（東側）～0.85m（西側）

（棺推定値は外法。内法では10cm～20cm前後は狭くなるとみられる）

・墓壙形状 長方形二段墓壙

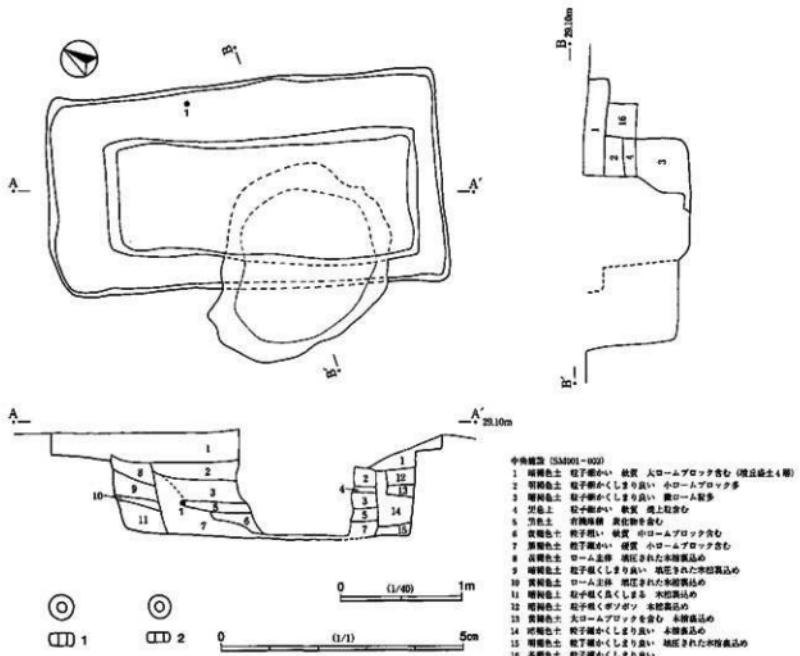
・墓壙下段 長さ約2.5m、幅1.1m（東側）～1.0m（西側）、深さ約0.6m（検出面から約0.9m）

・墓壙上段 長さ約3.2m、幅1.7m（東側）～1.6m（西側）、深さ約0.3m（検出面からの最深値）

・主軸方向 S 33度E

中央施設は、塚の頂上から深さ2.5mにも達する豊坑によって擾乱されていた。豊坑は盜掘坑の可能性も考えられたが、大型の陶磁器・瓦器等の出土を考慮すると、塚の施設とみられる（本節3項）。豊坑の存在と塚の再構築という事実を前にして、埋葬施設の検出は極めて困難であった。調査状況を総合すると、墳丘の盛土を取り外す過程で、西寄りの隣接位置に土器棺が出土したことから、その土器棺上部の高さで周囲を精査したところ、中央施設の墓壙が見いだされたものとみられる。掘込み面は不確かであるが、墓壙二段目の検出位置が第9図の墳丘断面ではc層以上の高さに当たり、掘込み位置は検出位置よりさらに高いと想定されることから、前記で推定した墳頂部平坦面から掘り込んでいる公算が大きい。墓壙基底面は旧地表下約20cmであり、墓壙の深さは約1.3mに復原される。なお、墳丘断面では豊坑掘削以前にも、擾乱するような二次的な穴が観察されている。b層は豊坑覆土とは異なるしまりのよい層であるが、現地観察で古墳築造後の掘込みに堆積したと明記できる、盛土とは異質な土であった。この穴はまさに推定墳頂面から開けられたもので、塚の再構築に先立つ、中世ごろの盜掘坑である可能性が高い。

棺の本体は出土しなかった。第9図の断面をみると、残された土層の痕跡は、底が平ら、小口と側壁とともに直線的ではなく垂直である。これらから箱形木棺の直葬と推定される。内部の覆土内5層に含まれる炭化物は、棺の痕跡とみられる。ただし、木棺は朽ちて上部層は陥没するか、陥没しなければ空洞のため周囲とは著しく異なる堆積が形成される。2・3層が陥没する形には観察されず、空洞を裏付ける堆積も見いだせないため、棺の高さや厚さなど、細部の復原は困難である。また、平面図からは、棺の両側壁が下段墓壙壁に接して、すっぽり嵌まる状態



第9図 岩名4号墳中央施設と副葬品

に復原しうるが、東側では下段墓壇壁の一部が階段状に広がっていると考えないと、説明のつかない土層断面が観察されている。したがって、下段墓壇の平面形は東側側辺が外に突出している可能性が高く、突出部には裏込めが施されていると考えられる。棺の両小口は、墓壇壁との間に隙間があり、隙間に裏込めが施されている。裏込めは填圧しながら細かく積む丁寧なものであるが、粘土は使用されていない。

棺の遺物はごくわずかであったが、副葬品とみられる白玉2点が出土している。1点は出土位置を確認でき、もう1点はフリイにより出土が確認された。ただし、出土位置が確認された1点は棺内ではなく、東側側辺突出部の裏込め位置に当たる。棺内覆土に含まれた土器はごく小片であり、棺と直接の関係を認めうるものではないため、墳丘出土土器としてまとめて後述する。

第9図1・2は滑石製白玉である。色調がかなり暗く、滑石としては蛇紋岩に近いものと観察される。1は径5.0mm、厚さ2.8mm、2は径4.5mm、厚さ2.0mmで、ともに両端面は真っ平らで平行に整形された薄い正円形の白玉である。側面はともにやや丸みを帯びていて、側面中央には稜をもたない。整形痕はわずかに残るが、擦れて失われ、表面はわずかに光沢をもつ。孔はともに径2.0mmの正円形で、孔の端部がわずかに丸みを帯びている。表面や孔が擦れていますので、実際に装身具として使用された可能性もある。

白玉は2個とも極端に扁平で、算盤玉形が含まれない。この2個のみで判断する限り、白玉の中でも最新相である可能性が高い。遡っても古墳時代中期後半以降であり、後期の可能性もある。

周溝内施設 (SM001-002, 第10図)

本古墳の南東側周溝底に、埋葬施設とみられる土坑1基が検出されている。

・施設の形状 隅円長方形

・施設の規模 長さ1.85m、幅0.83m（北側）～0.71m（南側）、深さ0.46m（周溝底から）

・施設の方向 N32度E

施設の床面は標高26.80m（北側）～26.70m（南側）であり、10cmほど北側が高い。幅も北側が広いことから、頭位は北側（やや東に振れる）とみられる。ただし、施設自体は周溝の方向に一致しているため、原位が絶対方位を意識したものとはいえない。

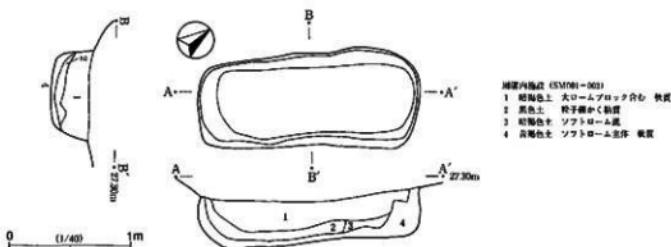
規模は、棺を納めると大人1人分の幅よりも狭くなってしまい、床面も角が丸い形状であることから、しっかりした棺の存在は想定にくく、直接埋葬した可能性がある。

掘込み面については判断する情報がない。ただし、施設の周囲およそ2.7m×1.8mの範囲が、ほかの周溝底部よりも20cmほど不整円形に低くなっている。本施設も二段墓壙の可能性がある。周溝底から施設の床までは約0.7mの深さに達する。本施設は4号墳に対する追加の埋葬施設と考えられるので、周溝がある程度埋まった状態から掘り込まれた可能性もあるが、まだほとんど埋まっていない状態、すなわち築造から間もなく營まれたとしても矛盾のない状況である。

周溝内施設内からは弥生時代から古墳時代にかけての土器細片が少量出土しただけに留まる。ただし、周溝底の墓壙上段付近で、第8図1の土師器壺が出土している。古墳出土土器の中では最も遺存状態がよく、半周以上が残存しているので、古墳供獻土器もしくはこの周溝内施設への供獻土器の可能性が高い。土器は前述の通り、鬼高式の古相を示す。古墳時代後期前業の所産とみられる。

（3）土器棺墓と副葬品

岩名4号墳の墳丘下部、5B-33グリッドから、土師器壺・壺を組み合わせた土器棺が出土している。調査時には、この土器棺が本古墳の最初の埋葬施設と認識され、前期古墳と判断される根拠となつた。しかし、土器棺は円墳の中心ではなく、約4m西寄りに位置している。中央施設が別に存在することを考慮すると、古墳の埋葬施設かどうかを慎重に検討する必要がある。



第10図 岩名4号墳周溝内施設

土器棺が出土した層は、明らかに人為的に動かされた土で構成される。出土位置は弥生時代後期豎穴住居跡（8号住居跡：SI008）と重なっており、古墳墳丘断面に合成すると（第6図）、豎穴住居跡の覆土上面に、土器棺の基底面がほぼ位置していることが分かる。B断面の左側（東側）は旧地表が低く、この高さより土器棺は明らかに高い位置にあるが、付近は緩やかな傾斜地であり、地形的に高い右側（西側）の旧地表高に比べると、土器棺基底面は少し低い。したがって基底面が置かれた豎穴覆土上面は旧地表面とほぼ同じ高さと考えてよい。一方、土器棺上部はどうか。弥生時代住居跡の周堤帯が検出されていない点に注意を要するが、土器棺上部は旧地表より明らかに高い。土器に風化の痕跡はないので、土器棺は土に覆われていた可能性が高く、通常であれば円墳の盛土内という判断になるが、そう考えるにはやや疑問がある。土器棺本体から南に0.6m～0.8mの地点で、破片が2点出土していることである（第11図の○印）。古墳築造に際して一義的に營まれた施設であればしっかり埋納されるので、盜掘や動物による移動等でない限り、中途半端な破片の散乱は、意図的な行為としては不合理である。古墳の最初の埋葬施設という可能性は完全には排除できないとはいえる、土器棺より後に円墳が造営され、その結果、造営工事中に土器棺の一部が踏み荒らされたと考えるほうが、より合理的である。ただし、このとき土器棺には少なくとも土饅頭のような、簡易な被覆土が盛られていることを想定しなければならない。

なお、自然の地形であるか、人為の地形であるかを問わず、地蔵部分を墳丘の一部に利用するのは、古墳築造において頻繁にみられる手法である。

以上の所見から、円墳の中心に位置する中央施設が、岩名4号墳の一義的な埋葬施設であり、墳丘下で見つかった土器棺は、古墳に伴う可能性が残るもの、古墳に先立つ土器棺墓である可能性の方が高い。ただし、土器棺に簡易な被覆土を伴うことが条件である。以下、土器棺本体の詳細を記す。

墳丘下土器棺（第11・12図）

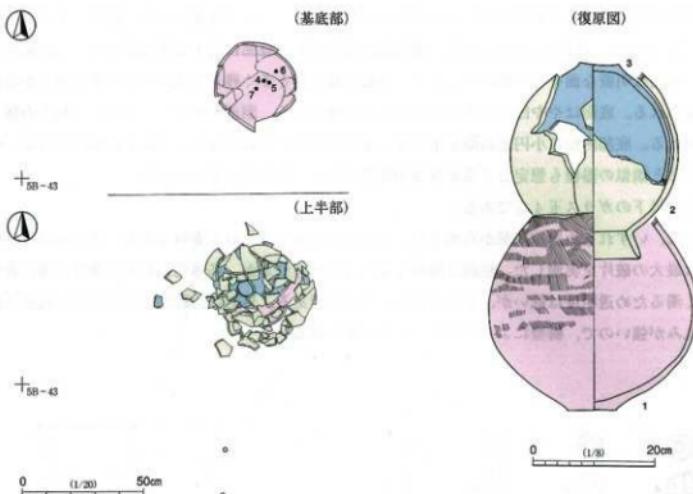
第11図には左に出土状況図、右に組合せの復原図を示した。墳丘下土器棺を構成する土器は3個体あり、基底面に置かれて主たる容器の役割をしていたのが1で、蓋の役割をしていたのが2・3である。1・3はともに口縁部を打ち欠いた壺の胴部を用い、割れた破断面どうしを合わせたような状態で出土している。両者は破片が散らばることなく潰れた状態で出土し、とくに1の下部は形を保っていただけでなく、内部から、副葬品としてガラス玉が4点出土した。埋葬施設として設置され、原位置を保っていることを裏付ける。

一方、2の出土状況は次の5点で1・3とは異なっている。

イ) 口縁部が壊れている。ロ) 底部と胴部の一部が欠失している。ハ) 破碎度が高い。ニ) 一部が散乱している。ホ) 蓋である3に比べて、胴部は高位で出土し、口縁部の一部は最低位（1の内部）で出土している。

このうち、ホ) の特徴から、2は逆位（倒立）の状態であったことがわかる。また、出土状況図において2が3を覆っている状態であるのに対し、口縁部片は1と3の間に挟まって出土していることから、2が3を包んでいる状態、すなわち入れ子にしている状態と推定される。非破壊の状態では2に3を挿入できないが、ハ) のように破碎度が高く、ロ) のように底部から胴部側面にかけて縦の帯状に欠失部分が認められることは、3を入れ子にする際に、2を縦に分割し、細長い破片を棒状に合わせた痕跡と考えられる。口縁部は破片を接合するとイ) のように全周する。合わせた口縁部は1に差し込まれた可能性が高い。

しかし、ニ) の散乱破片のうち、離れて出土した2点（○印）は口縁部である。完全に差し込まれた状



第11図 岩名4号墳墳丘下土器棺出土状況

態では散乱しにくい部位である。散乱時には口縁部の一部が差込口から外れていたと考えなくてはならない。この点、土器棺の主容器である1は正位ではなく、やや斜めに設置されており、出土状況図においても、1に対して蓋となる2・3が左(西)にずれている。斜めに構築されたのなら、潰れ方によっては、差込口から口縁部の一部が外れる事態も想定される。土器棺は垂直構築ではなく、西に傾倒した、斜め構築であった可能性が高い。

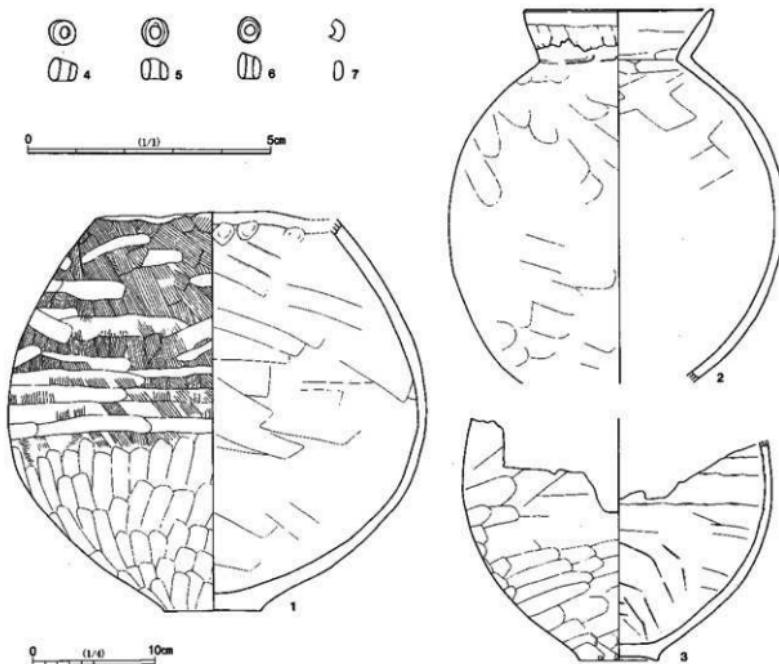
棺を構成する土器と副葬品は第12図に示した。土器は以下の3点である。

1は平底壺である。胴部は球形であり、平底は径8cmと小さく、内面底は尖りぎみである。胴部径は34.5cmで、高さ約33cmの位置で頸部以上は意図的に打ち欠かれ、破断面は直線的に揃えられる。壺としては厚手で大型であり、二次被熱は認められないが、内外面に小円形剥離が無数に生じており、とくに内側が荒れている。褐色の良好な焼成で、側面に明瞭な黒斑がつく。外面は明瞭な右斜めハケ(約5本/cm)、下半部のみ後にナデが施され、内面はナデにより滑らかに仕上げられる。底面はヘラケズリが施される。頸部内面には粘土の皺と指痕が残る。胎土に細かい砂粒・赤色スコリア等を含むが比較的密である。球形の胴部をもつ五領式新相(草刈古墳群土器編年Ⅲ期²⁾)に特徴的な平底壺である。2は素口縁壺である。口縁部径15.7cm、胴径27.5cm前後、遺存高30.5cmである。二次被熱の痕跡はないが、内面は小円形剥離が無数に発生し荒れている。淡い褐色ないしにぶい黄褐色で、肩部から下腹部にかけて帯状に黒斑がつく。意図的に打ち割られた古い破断面が胴部にみられ、口縁部は全部接合したが、底部から胴部にかけて縦に細い帯状の欠損部がある。外面は肩部に右斜め、胴部は横位に、比較的粗いヘラナデが施され、口縁部は粗い縦のヘラナデのちヨコナデが施される。やや縱長の胴部と調整は和泉式の壺と類似要素であるが、厚手で、

口縁部外側面が内渦気味である点から五領式の壺と判断する。3は平底壺である。胴部下半のみ出土した。胴径24.5cm～25.5cm、遺存高20.0cmである。明褐色に焼成され、腹部に大きな黒斑がつく。二次被熱はみられない。外面は明瞭な面をもつ横のヘラナデ、内面は輪積痕が多く残した浅いヘラナデが中心から渦巻放射状に施される。底面はやや凹み気味にヘラケズリが施される。胴部中央で打ち割られ、粘土の継ぎ目に沿って割れる。底部内面に小円形剥離が生じる。赤色スコリアを含まない密な胎土が他と異なる。やや縱長胴部の2と類似の器種も想定しうるが厚さが異なるので、五領式の壺と考える。

副葬品は以下のガラス玉4点である。

4～7は、いずれも土器棺内部から出土し、出土位置の分かれる良好な資料である。7のみ破損状態であり、図は最大の破片を実測した。色調は微細な違いは認められるが、基本的に緑みを帯びた薄い青色である。白く濁るため透明度は低いが、6のみわずかに透明である。外形は比較的歪みがあり、孔は正円筒形、気泡に丸みが強いので、鋳型によって製作されたとみられる。



第12図 岩名4号墳出土物

3 塚

(1) 古墳転用の塚と関連遺構（第5図 現況とおなじ）

・塚の形態 方形

・塚の規模 一辺14m (A断面方向) × 16m (B断面方向), 高さ約3.2m

岩名4号墳は、2項(1)において検討したように、もともとの古墳墳丘からさらに1.1mを盛り上げて、塚に転用されている。最高点は30.60mで、塚の南西辺に沿って走る溝の底が27.37mであることから、塚の高さは、最高で約3.2mに達する。岩名5号墳が最高3.6mであるので、これと匹敵する高さまで盛り上げてことから、両者は一对の塚と見なされた可能性がある。

塚への転用時期については、再構築土の出土土器が参考となる。とくに、すでに詳述した第8図12は再構築土内から出土したもので、瓦質の擂鉢とみられる中世遺物である。これが再構築の上限とみてよい。下限は後述する塚中央部の整坑から出土した陶磁器により求めることができる。したがって、中・近世に再構築され、機能した塚とみられる。

塚の下辺に沿って、地境溝とみられる溝が走る。これらはすでに報告した分であるが、南西辺には方形溝状区画³⁾ (SX001), 北西辺には1号溝状遺構 (溝002) が該当する。1号溝状遺構は、報告分よりさらに北東に延びることが測量図から確認できる。両者は溝の底部に連続する穴を有するなど、規模や特徴が類似していることから、同じ目的で同じ時期に掘られ、現代まで続く地境として機能してきた溝である。出土した陶磁器類は方形溝状区画出土の0.1kgに過ぎないが、方形溝状区画からは綠泥片岩製板碑の破片が出土し、すでに報告されている。これは塚の時期と性格を知る上で重要な資料である。中世には塚としてすでに使用される契機があったことを示す。

なお、南東辺は浅い溝があったことを断面から確認できるだけで、むしろ周囲より小高い、平坦な面が作り出されている。この平坦な面は調査時の所見によると建物があった可能性が高いが、具体的な遺構の痕跡はなく、平坦面が作り出された時期は特定できない。覆土が形成されない点から、つい最近の所産とみられる。

(2) 中央部整坑と遺物（第13図）

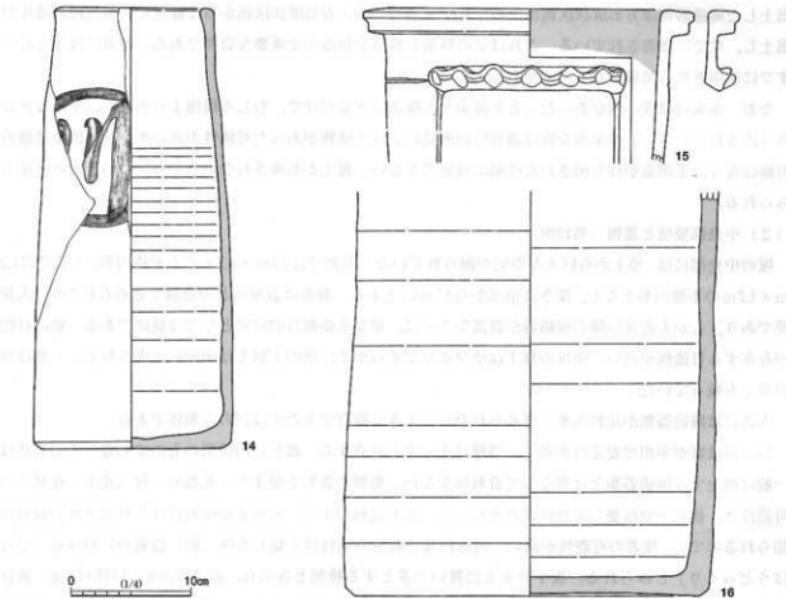
塚の中央部には、頂上から巨大な整坑が掘られている。上部では1.5m×0.7mの不整格円形、下部では1.2m×1.7mの不整円形をなし、深さは頂部から2.5mに達する。調査は盜掘坑との認識で進められたが、大規模であり、しかも近世以降の陶磁器が豊富なことは、単なる盜掘目的の穴としては疑問である。別に目的が存在する可能性が高い。整坑の覆土はボソボソで柔らかく、他の土層とは明瞭に区別される。一部は空洞部分も残っていた。

内部には陶磁器類が比較的多く認められたが、大きく接合できたのは図の3個体である。

14・16は底が平坦で安定性が高く、器壁はまっすぐ直立する、細長い円筒形のものである。この形状は一般に出土する陶磁器類とは異なって資料は少ない。類似の資料を探すと、花器の一種（花生、花瓶）の可能性と、徳利や焼酎甕の可能性が考えられる。民具資料の中に、酒屋名が染め付けられた徳利の資料が知られるので⁴⁾、後者の可能性が高い。14は白地に藍色の染付けを施した陶（磁）器製のいわゆる「びんぼうどっくり」とみられる。板や升を上に置いて蓋とする種類とみられ、高さ37.0cm、口径11.8cm、底径16.5cmの、やや口がすぼんだ筒形をしている。内面下部にのみ明瞭なロクロ目が残る。破断面はやや灰身を帯びた白色で、細かく発泡している。地の釉は上部ほど厚みがあり、冷却による細かく生じた升目状の

ヒビが風合いを帯びる。高台はなく、底面まで釉薬が覆う。染付けは側面の表裏にのみ大きく施され、一方は「〇」の中に「川」、一方は縦に「川口」と豪快な筆跡で書かれている。屋号であろう。酒の配達用に酒屋が特別注文した徳利と考えられる。近世瀬戸・美濃産に質がよく似る。16は外面がつるつるして光沢のある、褐色～暗褐色の釉に覆われた、陶器の壺である。底径30.5cm、現高約34cmの寸胴な筒形をなす。厚さが1.1cm以上と厚手で重量がある。外面は全面釉に覆われ、一部に自然釉が掛かって青みを帯びた個所や線状に暗い赤みを帯びた線がみられる。内面は横のナデ痕跡が明瞭で、光沢のない黒色に覆われる。破断面はセピア色で、胎土に大粒の砂粒を含む。底面には砂が融着している。近世備前焼その他の一般的な壺と質的によく似ており、焼成窯などの可能性は十分あるが、用途は特定できない。

15は瓦質の焜炉または移動式竈（ヘッツイ）の一種である。半周遺存する。口縁外周に高さ1.5cm、厚さ1.8cmの突帯が巡る。口縁内径は22.0cmである。表面は黒ずんで暗褐色、破断面は黄褐色で、口縁内面のみ幅5cmの帯状に煤状付着物がべったりと覆う。軟質の焼成で、胎土は比較的密である。側面に幅15.0cmの焚き口が開いており、焚き口の上には高さ1.8cmほどの波状装飾を施した庇がつく。庇の左側にはその延長線上にまっすぐ沈線が施されている。庇と口縁部突帯の間には、細い二重・三重の線状鉄錆が取り巻くように付着する。針金を卷いて補強したものとみられる。なお、ほかに同一個体とみられる底部の小片1点があり、低く小さい円錐形突起状の脚がみられる。



第13図 塚・竪坑内出土遺物（4号墳）

以上を総合した結果、豎坑の機能や陶磁器類の投入契機は不明であるが、塚の再整形は中世以降であり、陶磁器類が近世・近代の所産とすると、塚として最も活発に機能した時期は近世であったとみられる。

第2節 岩名5号墳

1 現況

岩名5号墳は、南西に印旛沼（鹿島川下流）の低地を直接見下ろす台地縁に位置している。付近は、背後の印旛沼（北東の中央排水路側）から台地をほとんど横断するように大支谷が入ってきており、鹿島川低地との間に幅100m、標高23mという低い陸狭部を形成している。本古墳はこの「馬の背」状台地の中央部に築造されている。本古墳の南西側と北東側はそれぞれの谷へ下りる急傾斜地であり、本古墳が台地上面を幅いっぱいに占拠している状況である。北西側の地形はかつての民家造成により大きく削平され、高さ5m前後の崖が迫っている。

第14図は発掘調査前の岩名5号墳測量図（等高線間隔：20cm¹¹⁾である。本古墳は荒れた山林で覆われていたが、伐採後には低地から直接見上げることができ、残存していた径約19m、高さ約3mの円形墳丘は遺存状態も比較的良好で、視覚的には規模以上の存在感を有するものであった。

周溝は埋没していた。墳丘は南西側が赤道により削平されていたほか、裾が四角形に近い直線的な形に削り込まれていることから、耕作などによる削平ではなく、意図的な改変を受けていた可能性があると判断された。赤道は県道に遮断された後に進入路を付け替えた痕跡があり、かなり古くから台地上を結ぶ道路であったと観察された。本古墳からは県道を挟んだ台地上の岩名4号墳をやや見上げるように望むことができ、ほぼ同じ大きさ、同じ高さで対峙していることから、二基一組の利用も想定しうる。よって、本古墳も塚への転用が疑われた。

周囲の地層は、すでに古墳築造以前までの浸食でローム層がほとんど失われている。高いところでは、標高25.2mで厚さ約20cmの黒色土（古墳時代の旧表土）が検出され、その下位にローム質の黄褐色粘質土が若干認められる場所がある。その下層はすぐに褐色粘土層、白色粘土層へと移行し、標高23.5m以下で砂層（成田層に相当）が認められる。

2 古墳の墳丘と埋葬施設

（1）墳丘と周溝（第15・16図）

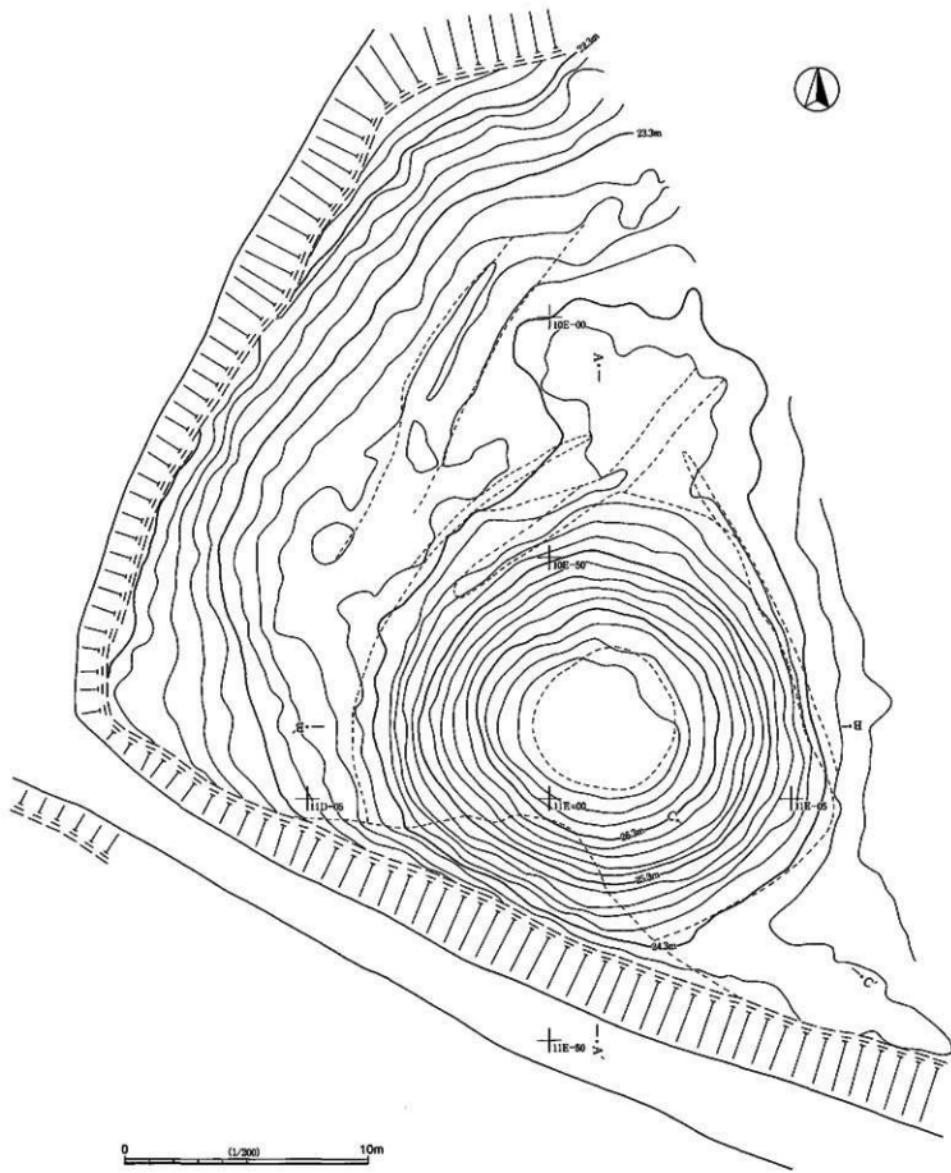
古墳の墳丘調査結果は以下のとおりである。

- ・古墳の形態 円墳
- ・古墳の規模 墳丘長（直径）21m、墳丘高 3.6m前後

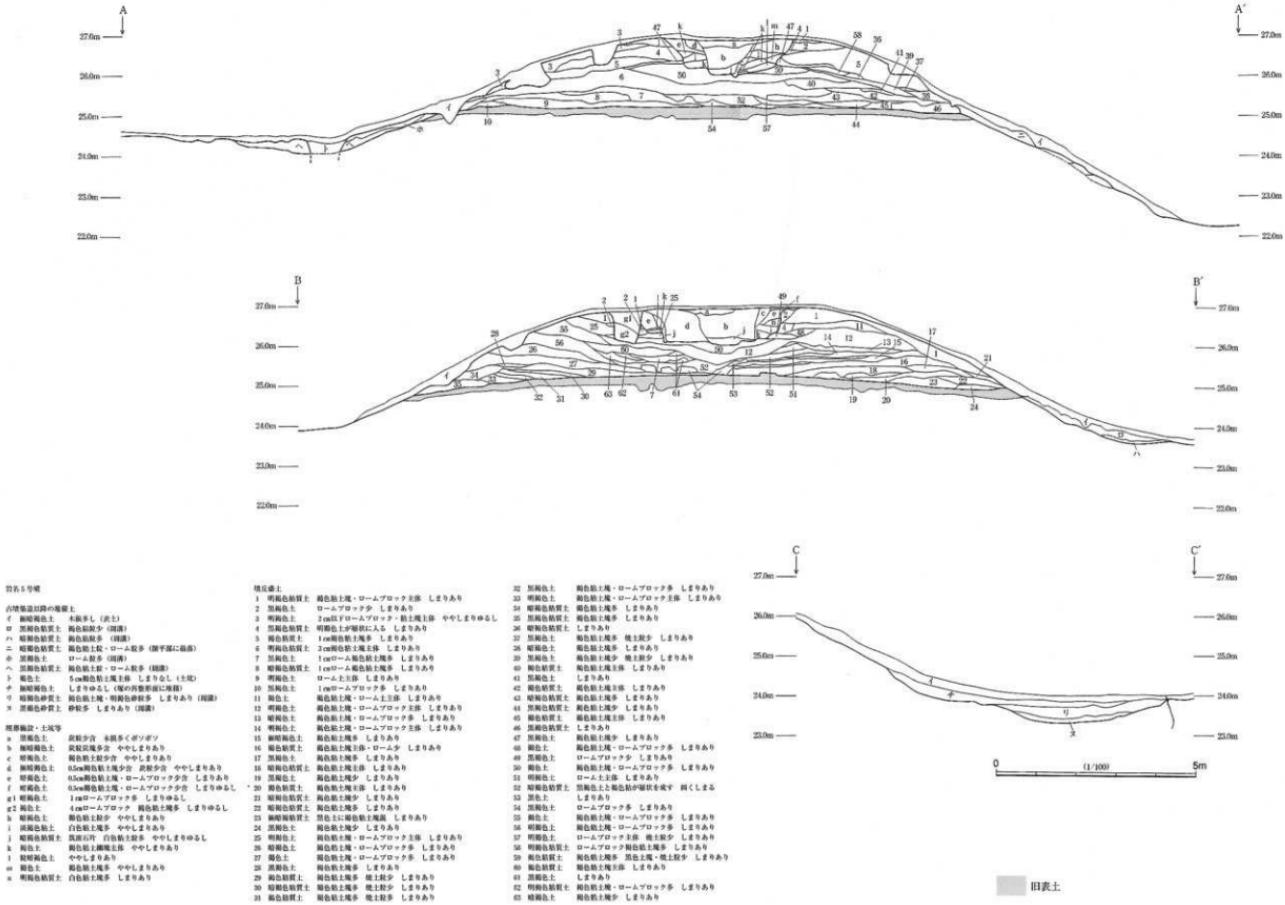
周溝北側に、幅3.3mの陸橋状部分がみられる。陸橋状部は周溝外より34cm低くなっているが、左右の周溝底からは約25cm程度高く、掘り残されている。周溝の深さは南東側などで約60cmあるが、周辺地形が傾斜しているため、外側の立ち上がりがかなり浅くなっている場所が多い。周溝外周の形はおおむね円形ではあるが、幅は一定でなく不整形である。周溝外周を含めた総長は約27mである。

周溝内部の覆土にはとくに入為的な痕跡が認められず、自然な埋没とみられる。

墳丘は無段築で、最高点27.07m、墳頂最低点23.34mで、比高は3.73mに達するが、北側からの比高は3.33mである。墳頂平坦面は径6mのほぼ円形であり、削平のためやや楕円形になっているがほぼ正円形に復



第14図 岩名5号墳の墳丘（調査前）



原される。墳丘傾斜角度は良好な遺存部分で約30度、墳裾ではわずかに緩やかであるが、周溝内周の立ち上がりは約25度に達している。均整な円錐台形の墳丘である。

標高25.2m前後が旧地表であり、その上部が盛土である。盛土高は1.8m前後で墳丘高のほぼ半分を占め、残り半分が周溝掘削に合わせて地山を削り出した部分である。旧地表は若干の丸みを帯びて周囲に傾斜しており、もともと地形的に若干高かった場所を利用して築造された可能性が高い。

旧地表面は黒褐色土ないし極暗褐色土である。褐色土を多く含むのは、古墳造営前の状態が平坦面ではなく、細かく凹凸していたためとみられる。その表面には、薄いが墳丘下の全面にわたって焼土粒を多く含む層が認められた。その厚さは0.5cm～数cmで、表面の凹凸に合わせて顕著な部分と不明瞭な部分が認められ、焼土粒の多い部分では炭化粒も比較的多く認められた。明白な土坑、柱穴、遺物集中区等の他の人的所作を示す要素は認められず、祭祀性は乏しい。古墳構築に先立つ整地に伴い、草木を除去した際の抜根・焼却の痕跡と考える。

盛土は基本的に黒色土と褐色粘土を主体に構成されているので、おもに周溝掘削土を盛り上げたものと考える。ただし、ローム土が比較的多く含まれることから、周辺の浅い部分の土を合わせて使用した可能性が高い。積み方は、黒色土と、褐色土ないし明褐色土を交互に積むことを基本とする。手順は以下のとおりと推定される。まず、周溝に近い周辺部からドーナツ状に積み上げてゆき、徐々に中央部にむかって押し出しながら、約1mの高さまで積む。次に、中央部に土を充填しながら、さらに0.6mほど積み上げる。最後に中央の凹みと周囲に土を被覆させ、墳丘面を整える。

(2) 墳頂部の状況と石棺（第17図）

墳頂部

墳頂部で草木の根に覆われた表層を約5cm取り除くと、平坦面の北側縁辺部で、壺片を中心とする須恵器片が集中する場所が検出された。平面で掘込みの境界が一部確認されたことと、鉄器が伴出したため、当初は埋葬施設（旧：第1施設）と考えて調査を進めたが、この掘込み線はのちに石棺墓塚の境界と一致していることが判明した。これら須恵器片は墳頂に供獻された土器と判断される。

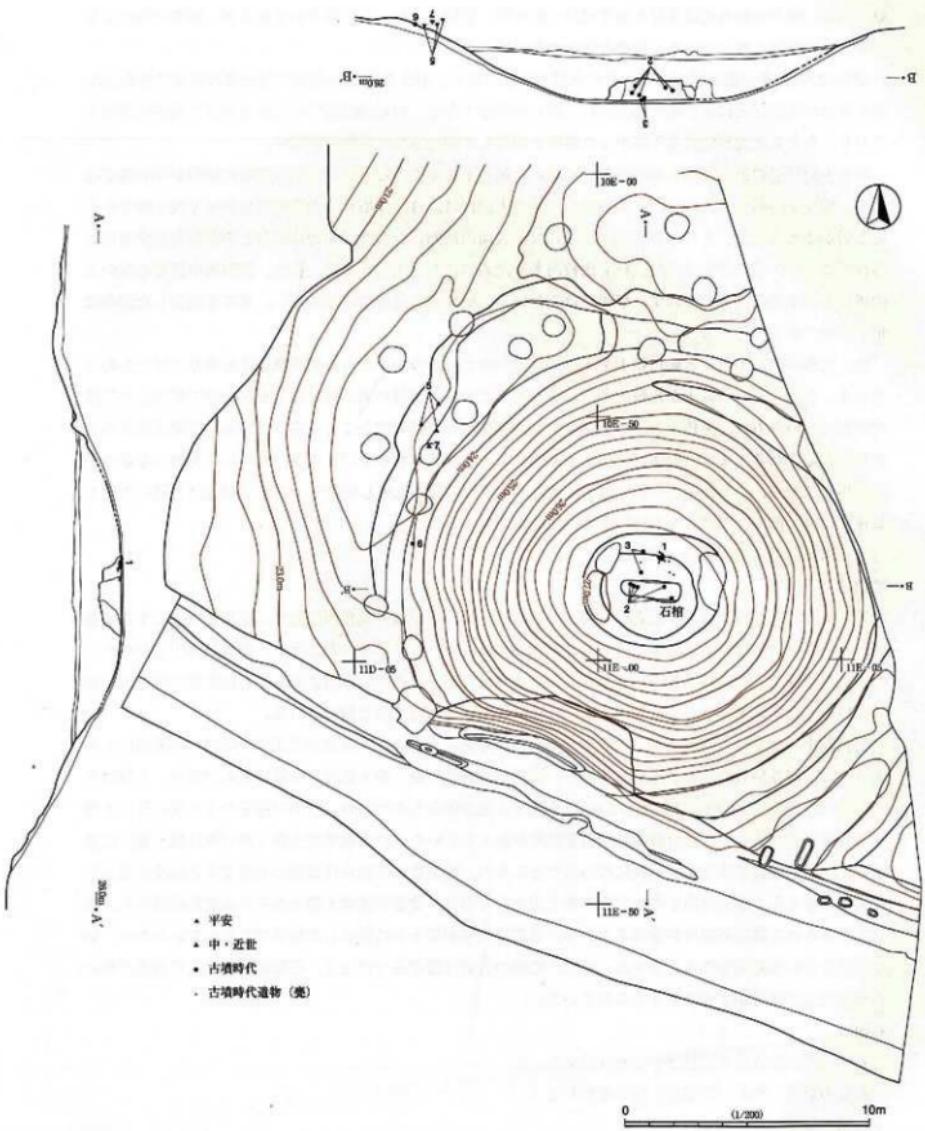
墳頂部平坦面では、盜掘坑が中央に1か所、松根探掘坑とみられる長方形土坑（SK004）が東側に1か所みられ、埋葬施設や墓塚を擾乱していた。盜掘坑は石棺（旧：第2施設）全体に及んでおり、上部は掘り鉢状に広がって、上面では2.9m×2.2mにも達する徹底的なものである。断面の様子から2回に分けて掘られた可能性があるが、近世以降の陶磁器細片が混入していたのは盜掘坑覆土最上部（第15図a層）に留まるため、盜掘はかなり古い時代に行われたとみられ、近世以降の細片は盜掘の名残である陥没に混入したものと考える。盜掘坑内からは遺物が多く出土しており、墳頂部供獻土器とみられる須恵器細片と、副葬品とみられる鉄器の細片が主体を占める。遺物は大半が覆土中に散乱した状況で含まれていたため、盜掘坑はすぐに埋め戻されたとみられ、また、盜掘の目的は副葬品ではなく、石棺材であった可能性が高い。石棺材は主要部材がすべて取り去られていた。

石棺

石棺本体の調査成果は以下のとおりである。

- ・石棺の形態 板石（筑波石）組の箱形石棺
- ・石棺の規模 長さ2.3m

幅0.7m～0.6m（但し、内法推定値）



第16図 岩名5号墳の墳丘（調査後）

石棺材は、筑波石として知られる、茨城県筑波山麓で産出される変成岩の一種である。多量の雲母を含む板石であることから雲母片岩と報告されることが多いもので、本古墳の残存石材はこのうち比較的雲母粒が細かく、全体が褐灰色の砂塊にみえる柔らかい石質をもつ。質的には、栄町竜角寺浅間山古墳の石室材と近い関係にある。

棺床まで盗掘坑が及んでおり、床石が取り去られていたが、一部にその残骸と思われる石材が残っていた。良好なものでは、30cm四方の板石2点の残存が確認されている。これらは他の石棺残骸に比べて角が丸いなどの特徴があり、本来の棺材である可能性が高い。のことから、少なくとも1枚の大きな床石ではなく、比較的小型の板石を敷き詰めたか、あるいは数枚の板石敷きの隙間に充填したか、いずれかの床石とみられる。

板石の組み方は以下のとおりと考える。周囲の側壁溝が直線的ではないことから、側板は一枚ではなく、多数で構成される可能性が高く、溝内に剥がれ落ちている側板残欠の石目が縦方向に向いていることから、長い石材を横に使用したのではなく、短い石材を立てて並べた可能性が高い。北西側の側板に関しては残欠の切れ目から幅60cm前後と推定されるため、石棺の長さから逆算すると、側板を左右に4枚～5枚立て、標準的な組み方が想定される。幅からみて、小口にも同じ部材を用いていた可能性が高い。

石棺は狭く、丁度1人分の広さしかない。幅は西側より10cm以上東側が広く、床の高さも現況で東側のほうが8cmほど高い。頭位は東向きと考えられ、方位はS82度E、すなわち真東から8度だけ南に触れている。これは、ちょうど沼に面した台地の縁とほぼ同じ方向である。また、第17図の断面図をみると、盗掘坑の傾斜が急に広がる床から50cmの高さまでは、確実に側板で囲まれていたと考えられる。高さは内法で50cm～60cmと推定される。溝の深さは10cm～20cmであり、板石の部材長は60cm～80cmが想定される。なお、石棺幅が広い東側では、西側よりも壁断面が激しく内傾している。これが原状を反映しているなら、蓋石の大きさに規制されて内傾させた可能性があり、石棺蓋も側板と同じ大きさの部材が用いられた可能性が高くなる。

石棺埋設のための墓壙は以下のとおりである。

- ・墓壙の形態 不整椎円形
- ・墓壙の規模 長さ4.1m、幅3.3m、深さ0.8m

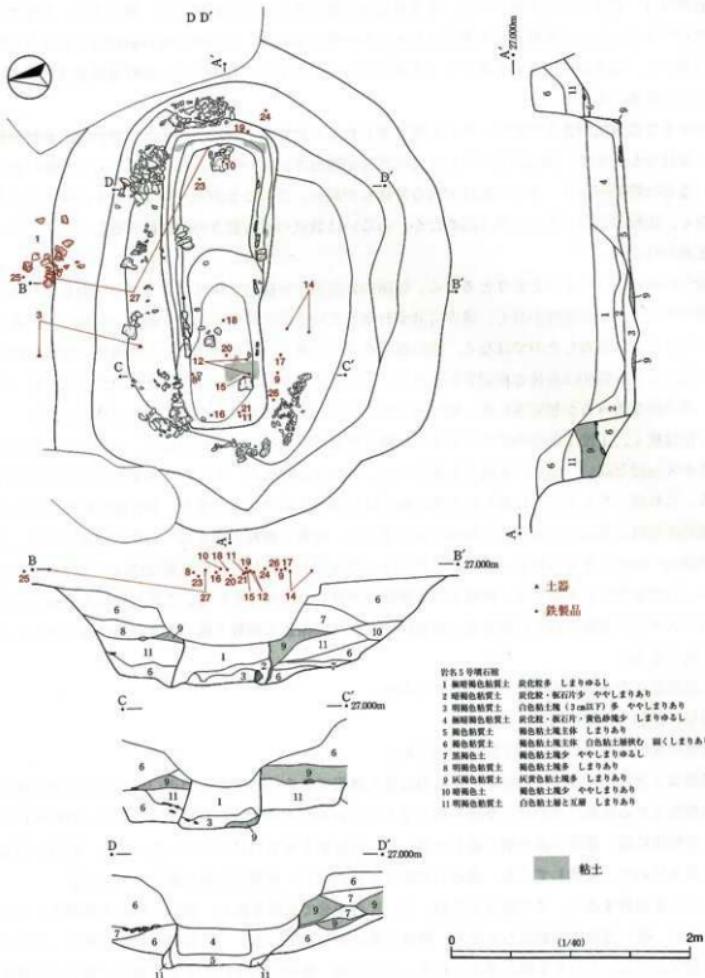
墓壙は大きめであるが、不整形で、断面は掘り鉢形である。石棺頭位の小口付近では全部を掘り抜かず、小口板を立てる位置に合わせて垂直に掘り落としているなど、手順の省略がみられる。石棺蓋に対する裏込めや石棺には、墓壙上部や墳丘盛土と異なり、白色粘土を多めに用いている。また、周囲に石棺材の剥片を敷き詰めて、補強している。裏込石の面は東側が高く、西側が全体に低くなっている。

これらを総合すると、まず頭位を決め、それに合わせて墓壙を掘り、頭位小口石を墓壙壁に立て掛ける。次に頭位（東）方向から側板石を組み、同時に裏込めをしていく、一旦西側まで組み終わった時点で裏込石を敷き詰める、という手順が考えられる。このため、最初に裏込めをする東側が、裏込めの層序的にも高くなつたとみられる。このほか、蓋石の高さで白色粘土を多く用いて整えている様子が観察される。

(3) 墳丘及び石棺の出土遺物（第18・19図）

墳頂供獻土器

墳頂から須恵器が3個体出土している。そのうち、1の壺と3の杯が墓壙北側の上面から出土し、墳頂部平坦面におかれたものと考えられる。2の壺は、墳頂から落ち込んだ多数の壺片とともに、盗掘坑から



第17図 岩名5号墳石棺

出土した。なお、壺は周溝内まで破片が転落していた。

1は須恵器壺である。粉々の状態で多量の破片が出土した。図は各部破片から図上で復原したもので、多少異なる復原も可能である。壺はよく還元焼成された硬質の須恵器で、外面上部は薄い自然釉を受けて暗灰褐色、外面下部は青みの暗灰色、内面は褐灰色が多い。胎土は粗く、砂粒と大粒スコリアを多量に含む。タタキ整形で、外面に斜格子状の節をもった平行タタキ、内面に青海波文で覆われる。底部は丸底とみられるが、焼き台が触れる部分で大きく凹んでいる個所がある。窯は特定できないが地元・関東の須恵器とみられる。2は須恵器壺の口縁部である。口縁部の開き方等からフ拉斯コ形長頸壺など、長頸壺の一部とみられる。ロクロ整形で、口縁端部は鋭い断面三角形に仕上げられる。内面にオリーブ色に光沢を放つ自然釉が粉状に掛かる。硬質で良好な還元焼成で、灰白色に黒色微粒子がちりばめられた滑らかな胎土は、瀬西窯をはじめとした東海産のものである。3は須恵器蓋杯の杯身である。細片のため正確な径を出せないがかなり小型とみられ、蓋受けからの立ち上がりが極めて低い。灰色の比較的良好な還元焼成で、黒色微粒がちりばめられた密な胎土から、東海産の可能性が高いと考える。

盛土・周溝内出土土器

盛土内と旧表土の遺物は、土師器細片わずか3点(30g)のほかは、後に述べるような縄文土器片と石器類のみであった。周溝からは土師器片がわずかに多く出土したが(150g)、細片に限られた。

4は盛土内(10E-91、石棺の南側)から出土した土師器杯である。土層觀察壁を取り外した際に出土している。薄手の土師器で、内外面ともミガキ、赤彩が施される。内傾が強い丸底の杯であり、比較的小型であることから、鬼高式の新相とみられ、墳頂部須恵器と近い年代の所産とみられる。

5は周溝底から出土した、平安時代の土師器碗である。1/4周ほどの遺存度である。ロクロ整形で、高台を有する。内面は黒色処理が施され、口縁部外面の1/3まで黒色に染まる。

6は周溝出土の壺の底部で、弥生土器の可能性が高い。

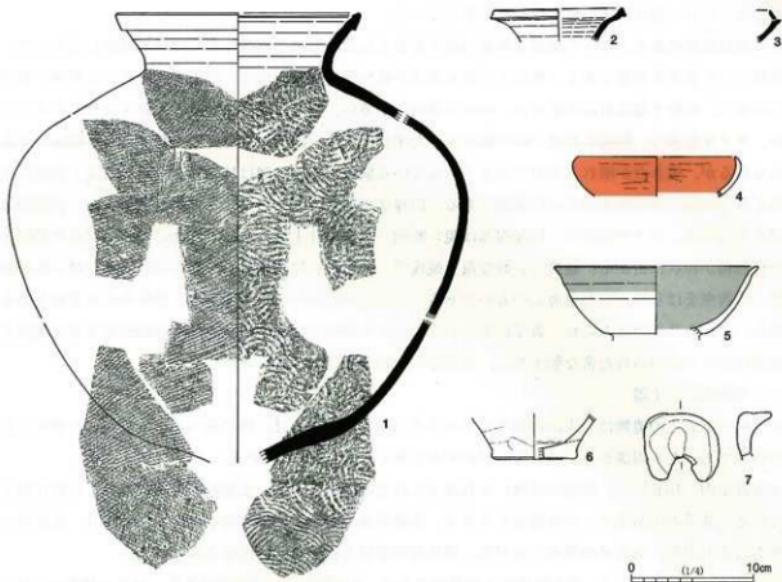
7は座棺墓上部から出土した土製品で、手捏ね土器とみられるが、時期は特定できない。

副葬品

副葬品としては、盜掘坑内覆土中に散乱して出土した鉄鎌片15点、鉄製刀子片6点、ほか鉄細片3点がある。刀子は一部が墳頂供獻土器と併出しているので、ともに墳頂へ置かれた可能性が高い。

8~22は鉄鎌片である。いずれも長頭鎌の一部である。1点を除いて石棺盜掘坑内の覆土に破片が散乱していたもので、13のみSK015の覆土から出土したが、これも埋葬施設に由来するものとみられる。8~13が鎌身~頭、14~22が頭~茎の断片である。鎌身には若干の相違があるが、基本的に片丸造りで、細く小さい柳葉形のものである(鎌身長27mm、幅9.0~10.5mm)。頭と鎌身との境界は不明瞭であるが、わずかな幅の違いから間の位置が知られる。頭は長さが分かるものはないが、細く華奢な延板状(幅5.5~7.5mm)である点が特徴的で、鎌身から鎌被までの頭の厚み(3.5~5.0mm)はほとんど変わらない。鎌被は棘状突起を左右に配した、いわゆる棘鎌被である。鎌被を茎に茎は幅がやや細くなり、厚みも茎尻に向かって徐々に細くなる。15と22には木質が残る。

23~28は鉄製刀子である。25・27は盜掘坑が及んでいない墳頂部須恵器供獻地点から、26は盜掘坑から、28は周溝からの出土であるが、状況から須恵器壺と一緒に墳頂部に置かれた可能性が高く、周溝からのものは墳頂から転落したとみられる。26・27が刀身、25・28が間から茎の断片で、25は鎌身の可能性もあるが、断面厚みの非対称性から刀子と判断する。間の破片が2片あり、2個体分が存在する。質的には25~



第18図 岩名5号墳墳丘・周溝出土遺物

27がよく似ており、いずれも身の最大幅は14.5mm、木質は認められない。28は木質がよく残り、木質にはハバキの痕跡が残る。茎長40.0mm、茎の最大幅12.5mmで、茎尻部分は腐食により内側から折れて膨らんでいる。

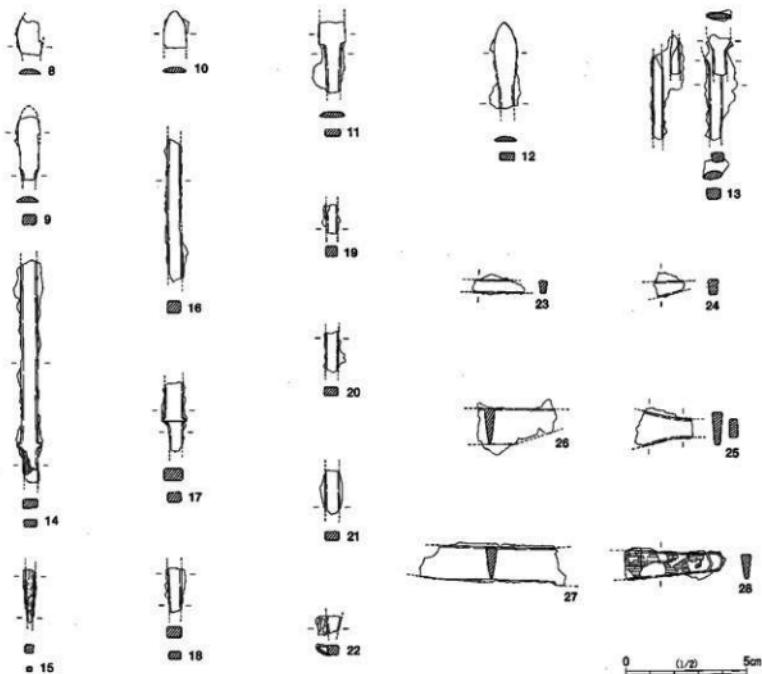
長頸鎌は、頸の長さが不明であるが、棘籠被を有する点で古墳時代後期の特徴を有しており、華奢な作りである点、柳葉形鎌身の闊が不明瞭である点は、その中でも比較的新相を示す。

3 塚

(1) 古墳転用の塚

中・近世において岩名5号墳は、岩名4号墳と同様に塚として利用されている。現況の墳丘測量図（第14図）では、南側と東側がやや直線的に削り込まれ、古墳よりも小型（塚長約19m）で急傾斜をもつ、高い塚に作り変えられている。平面は、円形を一部にとどめるが方形に近い。西側は古い道がかしめるように通っており、数度にわざって削り取られている。削平部の斜面には、奥部に溝をもつ段が2段～3段認められ、これらが旧来の道の名残とみられる。すなわち、旧来の道は近世には現在より浅い位置にあり、塚の麓を通っていたが、外側に幅を広げつつ次第に深く削り込んでいった可能性が高い。削平により生まれた切通しの壁には、SK006などが横穴状に掘り込まれ、何らかの施設が作られたとみられる。

墳頂部平坦面には古墳築造後の様々な利用の跡がみられる。技術上の限界で確認できるものは少ないが、



第19図 岩名5号墳墳頂部及び石棺出土鉄製品

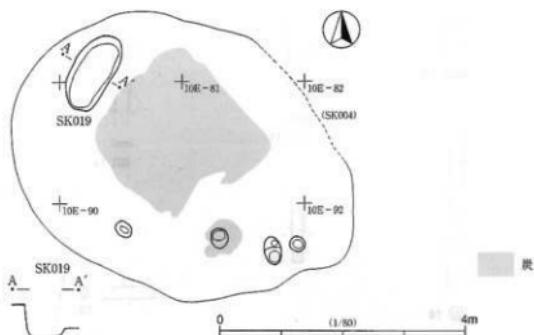
杭や柱を立てた痕跡があり（第20図），盜掘坑の陥没部には上部に大量の炭化物を含む層が堆積していた。遺物はそれら炭化物を含む層の上面に、若干の陶磁器の極細片が認められた。

墳頂平坦面の北西側には長さ1.3m、幅0.7mの楕円形土坑がみられる。有天井土坑に類似の形で、横から斜めに抉り込んでおり、底面が比較的固くしまっている。古墳の追加埋葬施設の可能性も捨てきれないが、近世の溝にも作られる形態の土坑であるため、この報告では塚上に作られた何らかの簡易な施設に付随する土坑として扱っておく。墳頂遺物のうち陶磁器はいずれも細片であった。

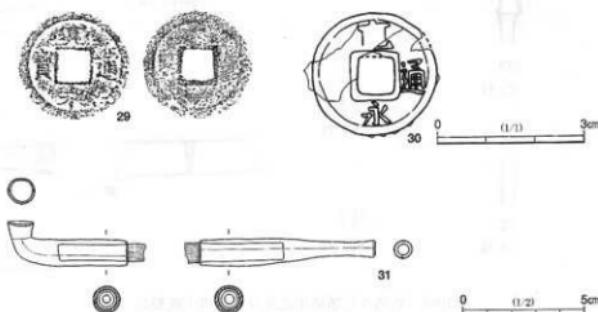
塚の整形面では遺物が少なかったが、銅鏡（28）と鉄鏡（29）が各1点ずつ出土した。

塚の利用は近代までとみられる。墳丘北側斜面には後世の溝が走っており、その墳丘側脇（10E-60付近）では、底外面に旧日本軍の退役記念に送られた旭日旗印入りの盃や、キセル（30）が出土している。

第21図には塚に関係する金属製品を示した。28の銅鏡は寛永通宝の一文鏡である。初鋤年代1700年の裏に文字がない新寛永銅鏡である。腐食は激しいが細い文字が明瞭に判読できる。29の鉄鏡も寛永通宝の一文鏡である。初鋤年代1739年の新寛永鉄鏡で、裏に文字はない。腐食のため肉眼ではまったく判読できず、X線写真でわずかに「永」「通」が判読できる。30は青銅製のキセルである。銅板を筒状に丸めて製作され



第20図 墳頂部塚施設（5号墳）



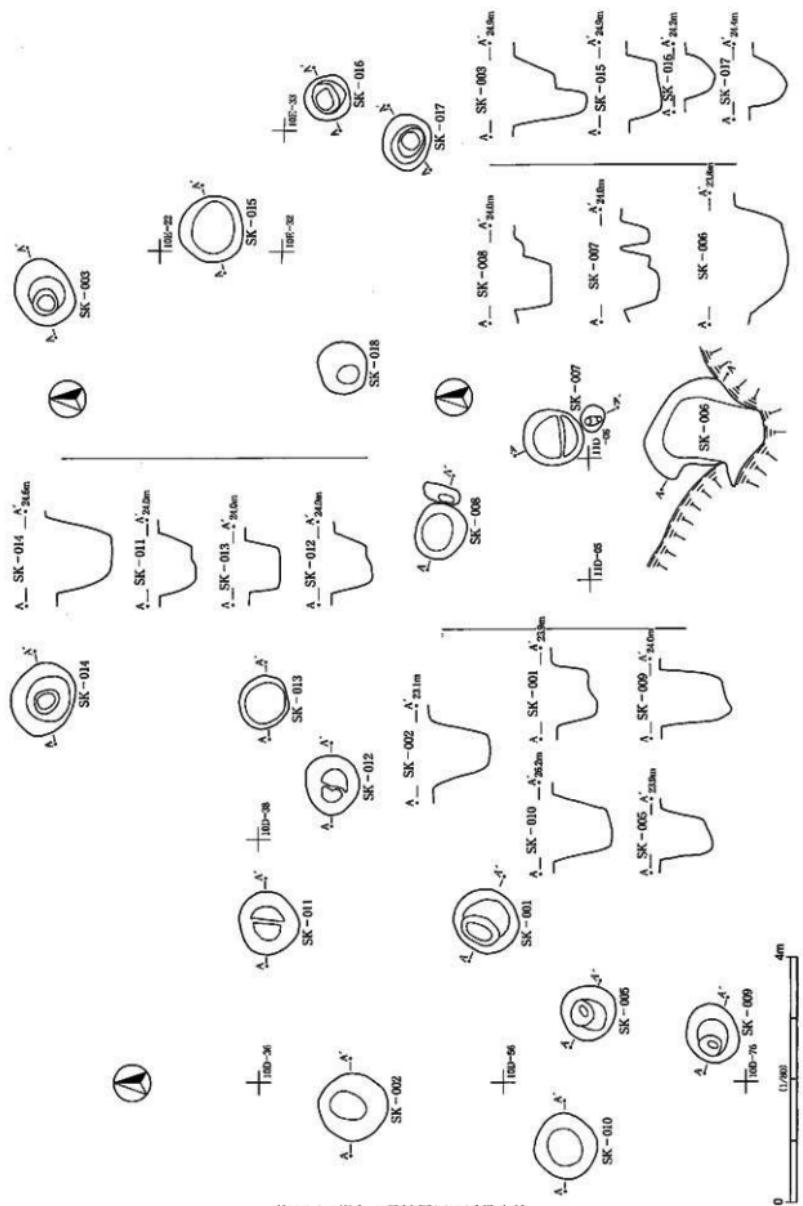
第21図 塚関連遺物（5号墳）

る。内部に木質がよく残る。キセルの中でも皿が小さく、急に屈曲するのは新相である。

(2) 座棺墓（第22～23図）

塚の周辺には17基の円形土坑が検出された。これらは塚を意識して周辺に営まれた近世の座棺墓とみられる。古墳の周溝埋没後の掘削であることは断面にも表れており明らかであるが、出土遺物が極めて少ないので、詳細な時期検討はできない。ただし、SK007上部から出土した上記の鉄錢が年代の参考となる。鉄錢は近世後半の所産とみられる。

座棺墓は径1.2m前後が多く、平面は正円形をなす。ほぼ垂直に掘り込まれ、底も正円形であるが、底の一部だけをさらに10cm前後掘っているものがある。深さは様々で、地山にローム質土が残る古墳北側陸橋付近に掘られた土坑SK003は比較的深く1.2mあるが、ほかは1.0m～0.5mの深さである。調査時に剥がした表土が10cm程度であることを考慮すると、座棺を埋めて土を被覆するだけの高さが十分に確保できないため、座棺墓としてはかなり浅い。ただし、遺存した腐植土の薄さを考慮すると、近代以降に表面が削られた可能性は排除できない。



第22図 岩名5号墳周辺の近世土坑

第3節 盛土及び旧表土の遺物

本遺跡の調査は古墳を主目的としたものであったが、調査区内からは古墳期以外の遺物も若干出土しており、ここでは古墳に直接関連しない遺物群を土器・石器に区分し、一括して取り扱うこととした。なお、時期的には旧石器時代から弥生時代に属するものであり、出土地点は古墳の盛土あるいは旧表土中となる。

1 石器（第23・24図）

出土した石器は旧石器時代から縄文時代に属するものであり、器種・剥離法・石材等によりできる限り分離することとした。

旧石器時代に属すると考えられる石器は、計22点存在し、磨製石斧・搔器・楔形石器などがみられた。また黒曜石などは縄文期の可能性も残すが、後述するように縄文期の石器群が多いものとはいえない。石材についても黒曜石が認められなかったことから、これらの石器群は旧石器時代に属するものと考えた。
局部磨製石斧（1） 頭部を欠失した局部磨製石斧を再利用した石器となろう。上部と側縁には小さな整形剥離を施しており、スクレイパーとしての機能を保有していたものと考えられる。刃部は精緻な研磨により作出され、鋭利な角度をもたせている。石材は流紋岩である。

尖頭器（2） 横長剥片の周囲に加工を施し、尖頭器としている。先端の整形はやや丸みをおびているため削器の可能性も残る。主剥離面での加工は認められない。石材は巖岡頁岩である。

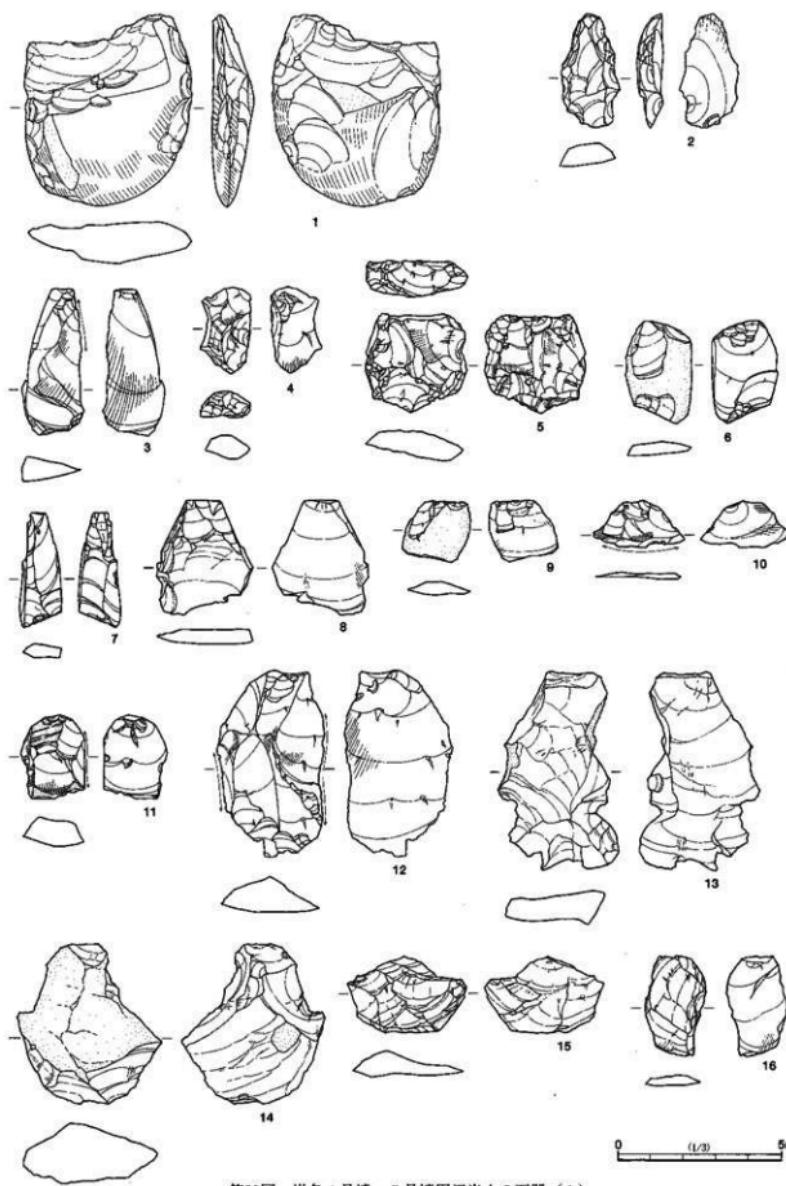
搔・削器（3～5） すべて黒曜石製で、3は半透明の良質な黒曜石を用いた剥片を素材とし、下端部の右に簡単な剥離を施し搔器としている。4・5は不純物を含有する黒曜石で、4は下端部に数回の剥離を施し削器としている。5は残核を利用したものとなろう。下端部に若干の使用痕を残す。

楔形石器（6～9） 6は表皮部分の剥片であり、上下端に小さな調整剥離が加えられている。珪質頁岩を利用した楔形石器となろう。7・8はチャート製である。7は石刃状剥片の下端を両面から剥離し、楔としている。8は左側縁を数回の剥離で整形している。9も6と同様に表皮部分の剥片を素材にしており、上部を両面から小さく剥離している。石材は流紋岩である。

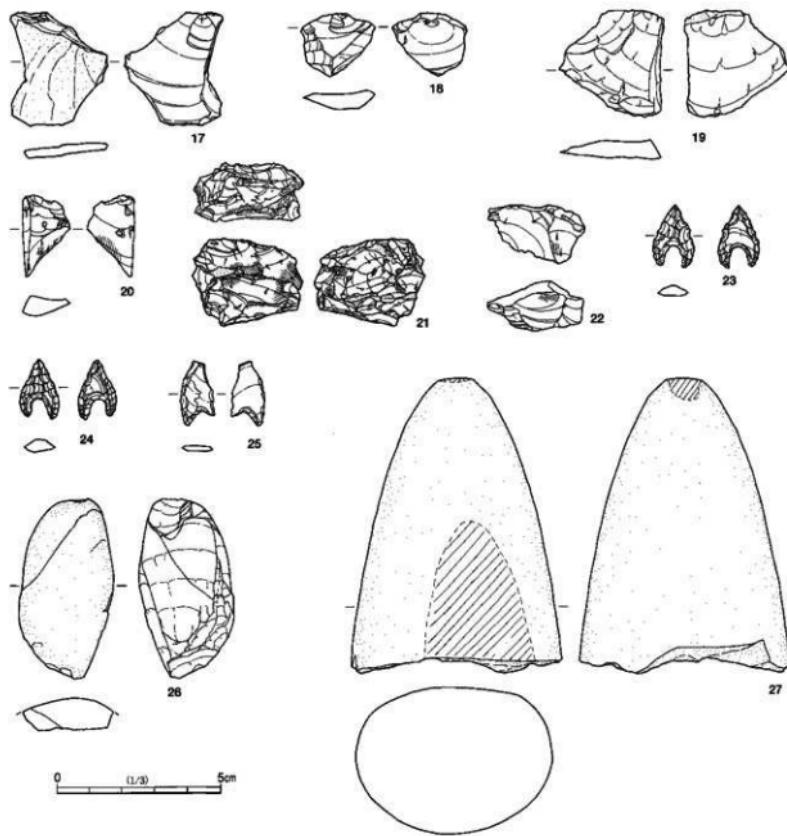
剥片（10～19） 10～12は、側面に調整痕あるいは使用痕が認められる剥片で、いずれも黒曜石製である。11は下部の抉れた部分に明確な調整痕が認められる。12は石器の素材としては十分な形状を有するが、両側縁に小さな刃こぼれ痕を認めるに過ぎない。石質は、10が縞状の黒色帯を含んだガラス質で、11・12は黒色味が強く気泡・不純物のみられる黒曜石である。13～16はメノウ製の剥片である。13・14は大型剥片といえようが加工痕は認められない。15・16も同様である。17・18は硬質頁岩であり、17の色調は灰白色を呈し、表面は節理面となっている。18は一般的にみられる灰褐色である。19は黒色安山岩で石器の素材にできるような形状を有するが加工は認められない。20は不純物を含む黒曜石の小剥片である。

石核（21・22） 2点が存在する。21は上下方向からの剥離が認められ、平坦な打面部が僅かに残る。不純物を多く含む黒曜石のため良好な剥片剥取は望めないような石材である。22も小石などを多く含む黒曜石で、平坦な打面から小剥片の剥離まで続けていたことが窺われる。

計22点の石器・剥片等についてみてきたが、これらの石器群は約120m程離れた異なる地点から検出されたものである。だが地形としてみた場合、同一台地上に位置している。出土地点としてみれば、1・2・4・7・8・10・12～22までの17点は、5号墳の調査時に検出されたものであり、周辺域には旧石器時代の石器群が包蔵されている可能性が強いといえよう。



第23図 岩名4号墳・5号墳周辺出土上の石器（1）



第24図 岩名4号墳・5号墳周辺出土の石器（2）

縄文時代に属する石器としては石鎌3点・石斧片2点が出土している。石鎌が4号墳の調査時に、石斧片が5号墳の調査時に検出されている。

石鎌（23～25） 3点の石材は異なり、23が赤色碧玉（赤玉石）、24が流紋岩、25が硬質頁岩を採用している。24・25は同様な作りで、基部の抉りが深く剥離も含めて丁寧な仕上げとなっている。25は薄い剥片を利用しているため、一次剥離面をそのまま残し周囲を加工するにとどめている。

石斧（26・27） 26は頁岩（黒色頁岩）製で頭部片と思われる。表面は滑らかであるが、研磨痕は観察できない。27は輝緑岩で上半部のみが遺存したものである。表面中央部は平よく研磨されている。

2 繩文土器・弥生土器（第25回）

次に土器群についても若干触れておきたい。土器群は縄文から弥生期に属するものが検出されているが、その多くは縄文後期に属するものである。その他には中期の小片が2~3点出土しているが、図示は省略した。なお、図示した1~13までは4号墳周辺から出土したもので、他は5号墳周辺から出土した。

（1）縄文土器（1~12）

土器は縄文後期の加曾利B式が主体となり、若干、早期の茅山式や後期末の安行式で構成される。

早期（14） 早期の土器としては、条痕文系が1点認められた。胎土には纖維を含み、表裏面は条痕によって整形されている。

後期（1~11、15~17）

1~10、15~17は加曾利B式に属するものである。1は胴部片で、太い沈線によって区画されその中は細い無筋Lの縄文によって溝たされた。裏面は箆状工具によって整形されている。器厚は薄く、精製土器までには至らないが精緻な作りとなっている。2・3は粗製の深鉢で粗い単節LRが施されている。2の口縁部片は、粘土絆を貼り付け指頭により凹凸を巡らせる。4~7は同一個体の破片で太い沈線で区画した中を単節LRの縄文で溝たしている。8・9も同一個体の口縁部片である。2~3条の浅く幅広の沈線を巡らしており、縄文は認められない。10は胴部片で太い沈線を巡らし、ハの字状にアクセントをおき、縄文は認められない。これらの色調は赤褐色のものが多く、焼成も概して良好である。15は鉢形を呈した器形となろう。縄文帯を太い沈線で区画し、一定間隔に縦方向に沈線を入れる。色調は淡い黒褐色を呈する。器面は精製に近い。16・17は加曾利B式でも新しいタイプの深鉢となろう。器面には縄文や条線が施されている。

11は安行I式に属するもので、口唇部は著しく肥厚する。口縁部にLRの細縄文を帯状に施文している。口縁がやや内弯するタイプの深鉢となろう。

（2）弥生土器（12・13）

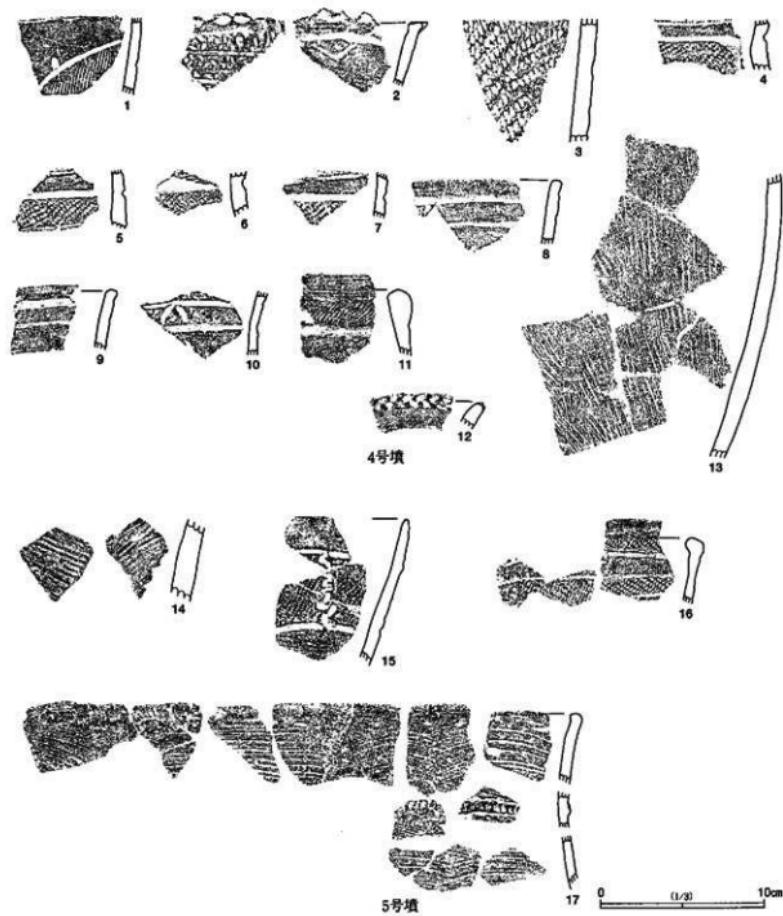
弥生期の上器片は4号墳の盛土内から多く検出されており、図に示す2点は後期に属する壺形土器の破片である。12は口唇部を箆状工具のようなもので交互に押圧を加えている。おそらくこのタイプは頸部に輪積を有する壺と考えられる。13は7片の破片が出土して、6片が接合したものである。器面は粗い撚糸文で覆われ、胎土には雲母のほか石英粒を多く含む小石が目立つ。器厚は7mm~9mmでやや厚手の大壺となる。いわゆる北関東系の土器群の中に含められるものである。

注1 石倉亮治・黒沢崇 2004 「佐倉印西線（緊急地方道路整備）埋蔵文化財調査報告書－岩名町前遺跡－」財団法人千葉県文化財センター（以下、「前回報告」と呼ぶ）のp24、第25図に報告している。2.9m×1.7mの長方形二段墓壙で、下段のほうが2.6m×0.8mの細長い形状をもつ。床幅が0.5mしかないと木棺としては細すぎ、「土坑墓」と報告している。覆土から箆上部がはずれた状態の屈折脚高杯脚部が出土しており、和泉式期の可能性が高い。岩名4号墳との前後関係が問題となる。

2 財團法人千葉県文化財センター 2000 「千葉県文化財センター研究紀要」21

田中 裕 2003 「五領式から和泉式への転換と中期古墳の成立」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11

3 前回報告のp27、第28図



第25図 岩名4号墳・5号墳墳丘出土縄文土器・弥生土器

注4 四街道市教育委員会 1987 「いつかどこかで見た民具－四街道市民俗資料館－」

5 調査前測量図の作成に当たり、任意高による測量を行い、基準点測量後に標高の近似値を等高線に与えた。このため、結果的に等高線は小数点以下1桁が奇数となる数値が与えられた。

第3章 まとめ

第1節 岩名古墳群の墳丘

岩名古墳群は、今回の調査により4号墳と5号墳が加わり、印旛郡市文化財センターによる報告分¹⁾などを併せて、基數は5基となった。ただし、岩名町前遺跡では4号墳の周囲に円形周溝状造構、方形周溝状造構と報告²⁾された小規模古墳が存在し、これらを含めると総基數は7基を数える。今後、高い墳丘をもつ古墳が新たに確認される可能性は低いが、小規模古墳に関しては、とくに岩名町前遺跡の未調査区などでは確実に存在するとみられ、古墳数の増加が見込まれる。

したがって、基數が少なく点在するような印象が持たれていた岩名古墳群であるが、実は一定のまとまりを有しており、その一帯は古墳時代に墓域として利用されたことが判明した。

これまでに確認された各古墳の墳形と規模は以下のとおりである（第26図）。

1. 岩名1号墳	円形方間に近い円墳	外径約12m
2. 岩名2号墳	方墳	長さ24m×22m、高さ3.1m（盛土高1.6m）
3. 岩名3号墳	方墳	長さ14m×14m、高さ1.6m（盛土高0.6m）
4. 岩名4号墳（SM001）	円墳	径21m、高さ2.0m～2.4m（盛土高0.7m～1.1m）
5. 岩名5号墳	円墳	径21m、高さ3.6m（盛土高1.8m）
6. 岩名町前円形周溝状造構（SM002）	小規模円墳	径4m 周溝のみ残存
7. 岩名町前方形周溝状造構（SM003）	小規模方墳	一辺6m 周溝のみ残存

出土土器の時期では、4号墳の墳丘下土器棺が最も古い。胴丸の壺、比較的縦長の素口縁壺の組合せは、草刈古墳群土器編年Ⅲ期³⁾すなわち五領式の新相である。4号墳と重複している岩名町前方形周溝状造構では、細片であったが、同じく五領式のハケ壺、高杯、小型壺が出土している。

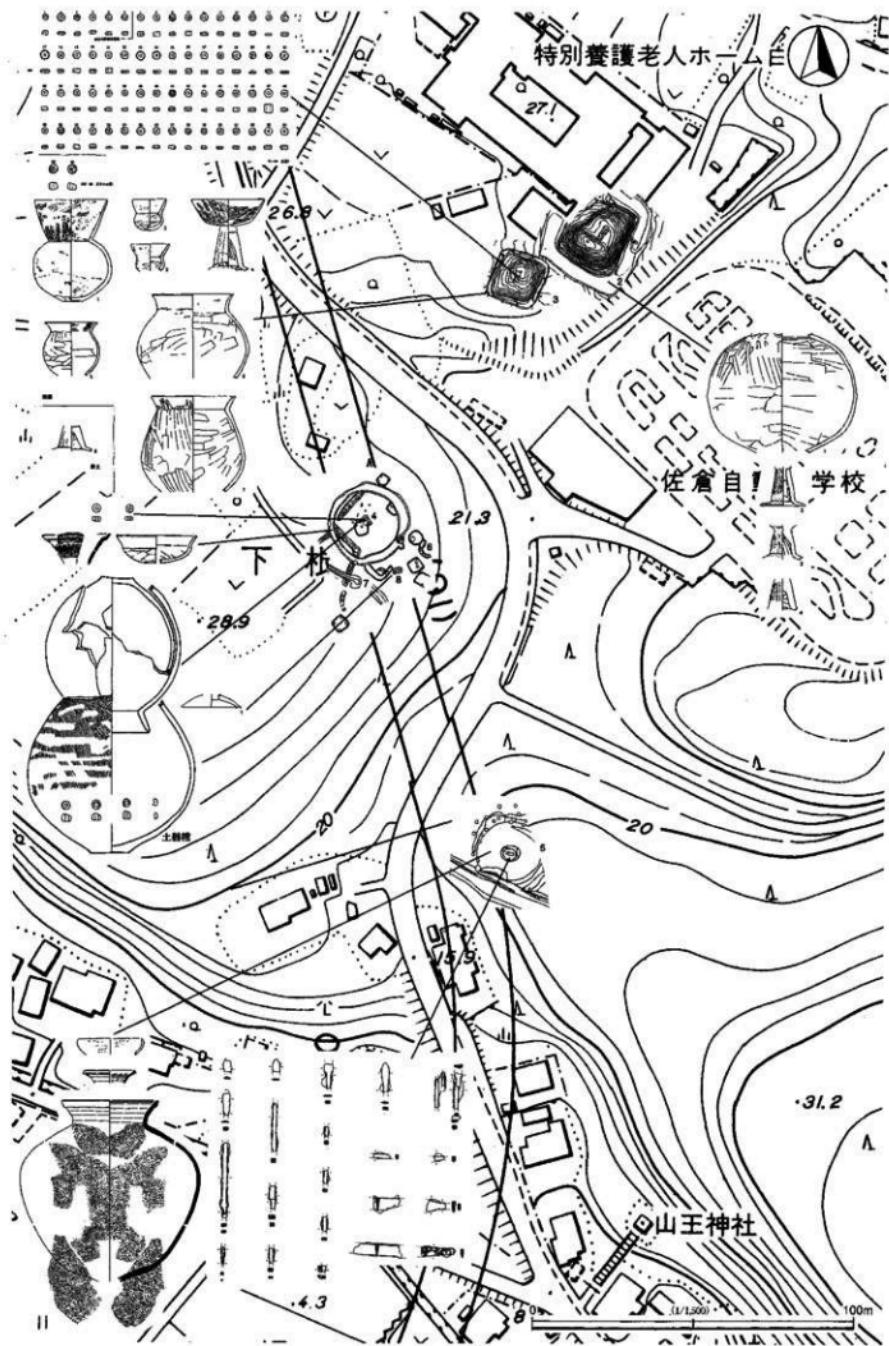
次に古いのは3号墳である。北側周溝から出土した直口壺の1は五領式の特徴を有し、次代に残る性格のものだが、旧表土出土片と接合した点は注意を要する。南側周溝出土の小型丸底壺（咲）2個、北側周溝出土の高杯1個と壺3個は和泉式最古相の土器群である。小型丸底壺は周溝の底付近から出土した。

2号墳では、南西側周溝隅（3号墳との接触部）から出土した壺の1は、3号墳の1と同じく五領式に近いが、周溝埋没中に外側から流入している。周溝上層出土の高杯では、形状的に2が和泉式古相～新相、3・4が和泉式新相を示す。なお、後述の岩名町前土坑墓からは和泉式の高杯片が出土している。

4号墳の周溝内施設上面出土土師器杯は鬼高式古相を示す。南側周溝下層出土須恵器壺は東海産とみられ、口縁部長と端部形状から古式須恵器の最新相（I期新）、古墳時代中期後葉を上限とする。

5号墳の墳頂から出土した須恵器壺は終末期古墳に伴う遺物として矛盾しないが、対比できる窯資料に乏しい。東海産の長頸壺と杯は、TK-217型式併行期以降とみられる。土師器杯は鬼高式の最新相を示す。

今回の報告分に関してみると、中期末ごろの築造とみられる4号墳は、古い3号墳等と似た比較的低墳丘の古墳であることが分かる。この点は、中期後半に築造された印旛村吉高浅間古墳が比較対象となる。吉高浅間古墳は同じく円墳であるが、低墳丘の状態で埋葬施設が設けられた後、高く盛り返され、墳頂部にも埋葬施設が設けられた稀有な古墳である。低墳丘の段階がある点で、4号墳と共通である。一方、最



第26図 岩名古墳群の調査成果

後に築造された岩名5号墳は、規模の割に極めて高い墳丘をもつ。5号墳は終末期古墳の一つであり、古墳が再び低墳丘化を強める中で、大型古墳とはいえない同古墳が高い墳丘を有するのは異質である。

第2節 岩名古墳群における埋葬施設

1 木棺と土坑墓

岩名古墳群の埋葬施設は、今回報告分を含めて、以下のように報告されている。

岩名2号墳主体部 長方形土坑 $5.15m \times 1.43m \sim 1.18m$, 深さ $1.16m$ 方位 $N36^{\circ}E$

副葬品：なし

岩名3号墳主体部 長方形 箱形木棺か $3.40m \times 1.43m$, 深さ $0.52m$ 方位 $N16^{\circ}E$

副葬品：滑石製白玉64点, ガラス小玉2点

岩名4号墳中央施設 長方形 箱形木棺 $1.70m \times 0.95m$, 深さ $0.60m$ 方位 $S33^{\circ}E$

墓壙（二段墓壙） $3.20m \times 1.70m$, 深さ $0.9m$ 以上

副葬品：墓壙内より滑石製白玉2点

周溝内施設 隅円長方形 木棺か $1.80m \times 0.83m$, 深さ $0.46m$ 方位 $N32^{\circ}E$

墓壙（二段墓壙） $2.70m \times 1.80m$, 深さ $0.7m$ 以上

副葬品：墓壙上面（周溝内）より土師器杯1点

上記のうち、2号墳例は、報告書の記載事実をあわせると、古墳の施設ではない可能性が高い¹⁴⁾。近在する4・5号墳は、ともに塚として再整形されており、墓である古墳に手を加えることに対して、伝統的な抵抗感は存在しない。詳細は掲載しなかったが、岩名5号墳においても墳頂部東寄りに現代の長方形土坑（松根採掘坑：SK004）が掘られているので、こうした後世の土地利用を考慮してよい。

3号墳主体部以下は古墳の埋葬施設である。形状から木棺直葬と考えられる。古墳の中心施設である3号墳主体部と4号墳中央施設は、長軸 $3m$ 以上の比較的大きい墓壙である。4号墳の中央施設・周溝内施設では、納棺場所をさらに一段深く掘り下げた、二段墓壙という形態が採用されている。これと同じ墓壙形態の土坑墓（SD002）は4号墳周辺の岩名町前遺跡で報告されている。

8. 岩名町前土坑墓 長方形 木棺か $2.60m \times 0.80m$, 深さ $0.56m$

（番号は第26図に対応） 墓壙（二段墓壙） $2.8m \times 1.7m$, 深さ $0.89m$

副葬品：覆土より土師器高杯1点（屈折脚高杯脚部）

最も古いのは中期初頭の3号墳主体部である。次の岩名4号墳中央施設とその周辺施設における二段墓壙の採用は中期後半から後期前半にかけての地域的特徴として注目すべきかもしれない。追加埋葬である周溝内施設が中央施設と同じ形態であり、周辺土坑墓も同じ形態であることは、古墳の運営主と他の構成員が、墳丘以外の施設的な面でも差別されるような、隔絶性を有していなかったことを示す。

2 石棺をめぐる問題

（1）石棺の型式と時期

岩名古墳群では唯一の石棺が、5号墳の墳頂部で検出された。調査結果は以下のとおりである。

岩名5号墳石棺 板石組箱形石棺 筑波石製 $2.3m \times 0.7m$, 高さ $0.5m$

石棺墓壙 不整格円形 $4.1m \times 3.3m$, 深さ $0.8m$

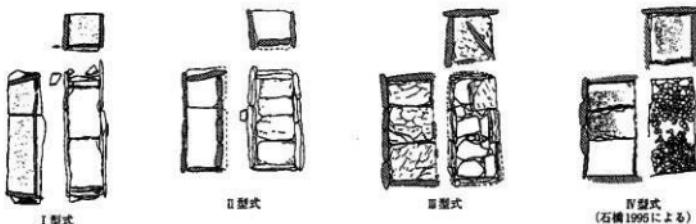
房総半島は板石を産出せず、板石組の箱形石棺や石室を生み出す素地はない。房総産出の石材としては、いわゆる「鐵石」や軟質砂岩など、柔らかな石材をブロックに切り、これを積み上げるもので、板石を立てて組み合わせる技法とは、発想がまったく異なるところにある。

板石を組み合わせる埋葬施設は、石材が茨城県筑波山産出の筑波石か、埼玉県秩父産出の緑泥片岩には限られ、筑波石が圧倒的多数を占める。茨城県南部の霞ヶ浦沿岸を分布の中心とし、千葉県北部の印旛沼・手賀沼・利根川下流など、「香取海」等と呼ばれたかつての「内海」沿岸に広く分布する。

板石組の石棺や横穴式石室の幅年は、おもに石材供給地である茨城県側で整理されている。千葉県側における整理も必要であるが、石材産地の動向やその影響はしっかり考慮されなければならない。本件に関しては、石材の大きさに注目した黒沢彰哉案⁵³と、床構造の退化に注目した石橋充案⁵⁴が参考になる。

岩名5号墳の石棺は、盜掘が激しく、本体の板材は一点も残っていないかった。ただし、剥がれた残片から、側壁が複数枚で構成されること、床に比較的細かい板石を用いた可能性が高いことが推定された。これは、石橋案におけるⅡ型式からⅣ型式に相当し、とくに床材からするとⅢ型式以降の可能性が高い。石橋は須恵器の伴出例を検討した結果、Ⅱ型式を7世紀前葉前後、Ⅲ型式を中葉、Ⅳ型式を後葉以降と考えている。この年代は遺物と合致する。岩名5号墳例は7世紀代の築造と考えて差し支えない。

筑波石の埋葬施設が茨城県から千葉県に拡散する時期について、石橋はⅡ型式以降と指摘する。Ⅳ型式には數的に減少してしまうから、千葉県内には受け入れて自らの伝統を醸成する時間的猶予もない。この地域が筑波石の埋葬施設を使用すること自体、茨城県側との関係にもっと目を配る必要がある。



第27図 石棺の幅年観

(2) 石棺の墳頂部設置をめぐる問題

岩名5号墳の石棺は重要な問題を提起している。墳丘の墳頂部に石棺が位置する点である。

東関東において、板石組箱形石棺はかの埋葬施設は、古墳時代後期前半には墳頂部中央部分に設置されているが、後期後半になると、中央部から外れた墳裾やテラス面の旧地表下に設置されるようになる。石棺には多数埋葬されることが多く、これらの特徴はいわゆる「変則的古墳」⁵⁵または「常総型古墳」⁵⁶の要件とされる。埋葬位置が移行する時期はおおむね6世紀後葉であり、大型の古墳においても、その後墳頂部に石棺を設置することはない。ただし、大型の古墳はこの時期に横穴式石室を採用するため、「変則的古墳」と区別して考えるのが通常である。一方、小型の古墳はこの時期以降、石棺を「変則的」な位置に築くのが原則となる。これは、地域的には相當に徹底された約束事であった。

岩名5号墳は大型古墳ではないが、高い墳丘を有し、存在感のある容姿をもつ点で、すでにいわゆる「変則的」古墳からは逸脱した存在である。築造時期は石棺と副葬品、墳頂供獻器から7世紀代とみられる。この時期の石棺が墳頂部中央に営まれたということは復古的ともいえる現象で、東関東特有の埋葬施設を有しながら、一方で地域的な約束事から開放された存在ということになる。

このように、岩名5号墳例は、終末期古墳において板石組石棺を墳頂部埋葬施設にもつ例であり、いまのところ県内ではほかに良好な類例を挙げることでのきない例外的存在として、重要な意味がある。

3 土器棺をめぐる問題

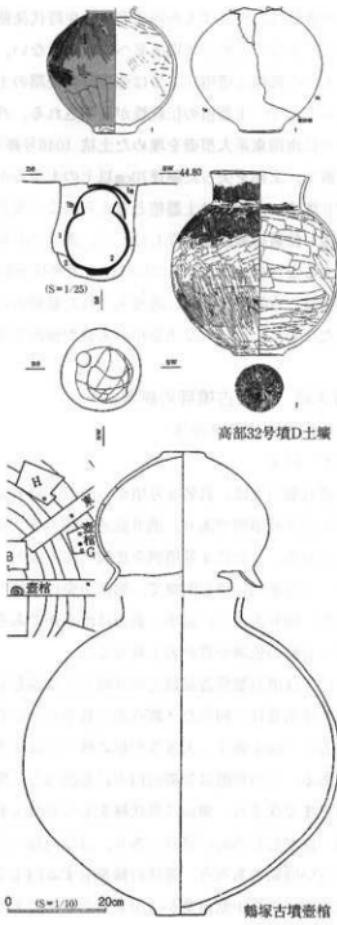
岩名4号墳の墳丘下に検出された、五領式の壺・甕からなる土器棺は、まず土器棺が設けられ、簡易な土鍛頭で覆われていたところを岩名4号墳の墳丘に取り込まれたとの見解を示した。墓であることは、合わせ口の組み方と、ガラス玉の出土から推定した。

弥生時代には、中期前半を中心に関東でも多くの土器棺が営まれた。これらには大型の装饰壺が用いられ、その状況から「再葬墓」と考えられている。

岩名4号墳墳丘下例は古墳時代前期後半のものであるから、弥生時代から続く伝統的墓制か、古墳時代に他地域から再導入された墓制か、が問題である。

弥生時代の「再葬墓」にはA: 完形の壺か、口縁部を欠いた壺を身とし、別の個体で蓋をするもの、B: 1個体を肩部で分割し、口縁部を蓋、胴部側を身として、補修孔を縫い合わせるもの、がある。極めて特徴的なBであれば伝統性を強調してよいが、本例は一般的手法といえるAに近く、即座に伝統的とはいえない。しかも、本例は甕を基本としている。また、「再葬墓」は弥生時代後期の検出例が少なく、伝統の断絶も考慮する必要がある。古墳に土器棺が伴う場合には、西日本の壺棺が古墳造営の拡大とともに各地に再導入されたという考え方も可能である。

千葉県内の前・中期古墳には、完形に近い壺・甕2個体が組み合って出土する例がある。土器棺と推定される顕著な例に、木更津市高部32号墳D土坑³⁾と、印西市鶴塚古墳壺棺⁴⁾がある(第28図)。遺骨は認められなかったものの、前者は甕を身、壺を蓋に合わせた点で本例に最も近く、後者は地域的に近い



第28図 千葉県における古墳時代前期の土器棺

うえに副葬品として白玉が出土したという点が注目される。前者は周溝内の施設であるから、古墳への追加埋葬施設と認めてよい。しかし、後者は中心から外れた墳丘内で検出されたことから、古墳に付随しているとはなしがたい。このような目で見ると、例えば、道祖神裏古墳周溝出土とされる2点のハケ甕など、土器棺の可能性があるものを慎重に検討する必要があろう。岩名4号墳墳丘下土器棺は4号墳以前の埋葬と考えられ、鶴塚古墳壺棺と同じく、古墳に付隨しているわけではない。では、どう位置づけてよいのか。

弥生時代後期の土器棺が少ないのは、埋葬方式が転換したためか、検出困難な位置にあるためか。前者の可能性は、例えば方形周溝墓が弥生時代後期に一時減少し、印旛沼以北では基本的に造営されない状況から、少なくとも方形周溝墓への転換はない。一方、後者の可能性には若干みるべき資料がある。

上記の鶴塚古墳墳丘下では弥生時代後期の土器棺（壺棺G）も良好な状態で検出された。古い例が隣接することで、土器棺の伝統性が証明される。八千代市道地遺跡では、土坑墓（047号跡：ガラス玉出土）の隣りに南関東系大型壺を埋めた土坑（046号跡）がある¹⁹。ローム（現表土から最大30cm）に達しない浅い位置で、上部を失った胴径70cm以上の大型壺が検出された。上部は旧地表より出てしまうが、胴部がすっぽり埋まっている状況は土器棺と考えられる。類例は八千代市上谷遺跡D009等でも知られる。

浅い位置の施設は遺存にくく、調査でも検出は難しい。弥生時代後期の土器棺が少ないのがこれに由来するならば²⁰、土器棺の伝統は古墳時代前期まで続いたと考えてもおかしくない。岩名4号墳墳丘下土器棺は、古墳時代初頭に再導入された墓制の可能性も残るが、古墳によって旧表土がたまたま封印されていたために、伝統的な土器棺の末裔が検出できたという可能性も考慮すべきである。

第3節 岩名古墳群の副葬品

1 白玉・ガラス小玉

（1）白玉

滑石製白玉は、岩名3号墳から64点、岩名4号墳中央施設から2点出土している。典型的な白玉といえるのが3号墳例であり、酒井弘志が報告書で考察したように²¹、古墳時代中期の文物として広域的に出土している。これに4号墳例を比較してみると、次の相違点が注目される。

1) 3号墳例は稜が明瞭で、側面中央に帯状の縫をもつ算盤玉形を多く含み、4号墳例は稜が不明瞭で、縫が一回り大きく、扁平、表面は滑らかである。

2) 石材の色調や質が若干異なる。

白玉は滑石製模造品類と切り離しては論じられないが、概略を記すと、極めて大量に作られた滑石製品で、埋納量は一回当たり数点から數千点という激しい量的格差があり、装身具であるほかの玉類とは扱われ方に一線を画す。大きさや形の統一にはあまり注意が払われず、擦痕を明瞭に残した粗雑な作りが特徴である。この特徴は初期の白玉にも該当し、例えば前期末の三重県石山古墳では、扁平な円板形から長い筒形まで含まれ、側面に帯状縫をもつ算盤玉形はあまりみられない。これと比較すると、岩名3号墳例は統一性がむしろ高い資料であり、ほぼ同様の白玉組成をもつ市原市草刈1号墳第3主体部・第2主体部例と近い時期であろう。帯状の縫を有する白玉を主体に、安定した製品が作られるのは、石製模造品製作の最盛期である中期前葉から中葉にかけてである。

4号墳例が上記組成にまったく含まれていないのは、系譜の相違というより時期差とみられる。大型で扁平な作りは初期にない新要素で、草刈1号墳で最も新しい第1主体部には小型で稜が不明瞭な白玉がみ

られることから、岩名4号墳例はさらにその後の段階である。

白玉は古墳時代中期の代表的遺物であるが、関東では後期においても引き続き出土する。房総における下限はとりわけ遅く、古墳出土例に限っても四街道市御山遺跡SX015、同SX021の両石棺内、木更津市俵ヶ谷6号墳石室内¹⁰⁾等がある。御山遺跡2基の鉄鎌は後述のⅢ～IV段階で、7世紀前葉までは確実に白玉が使用されたとみられる。したがって、岩名4号墳例は中期後葉または後期の所産である。

(2) ガラス小玉

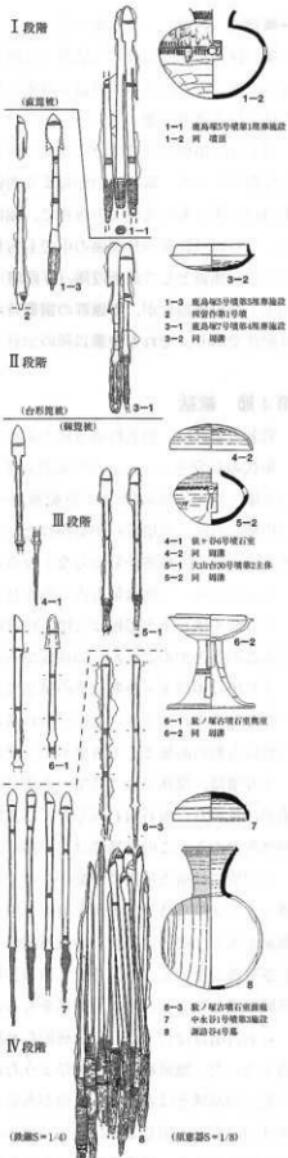
ガラス小玉は岩名3号墳主体部から2点、岩名4号墳墳丘下土器棺から4点出土している。この6点は大きさ、形状、色調などが極めてよく似た鋳型製のガラス玉である。付章における材質分析では極めて近い材質を用いていることが判明した。原料はカリ石灰ガラスであり、弥生時代から古墳時代前期までのガラス素材として主体的存在であるが、中期以降にはソーダ石灰ガラスが主体的存在に転換していく傾向が指摘された。地域的な材質の偏在は入手経路の問題に有効な手がかりを与えるであろう。

3号墳主体部よりも、4号墳墳丘下土器棺の方が数量的に優位である点は、地位と副葬品の内容に逆転現象が起きているようにみて奇異である。土器棺は3号墳より古いため、土器棺の時期までに入手されていたガラス玉の残滓が後の3号墳に副葬されたとすれば、これらの土器棺と古墳を同一集団における造墓活動の流れとして理解することができるかもしれない。

2 鉄鎌

岩名5号墳からは破片で鉄鎌15点と鉄刀子6点が出土している。このうち、時期的な特徴が判明するのは鉄鎌である。鎌はいずれも長頭鎌である。

杉山秀宏¹¹⁾は、鉄鎌分類の主軸に長頭鎌群の存在を据えている。長頭鎌群は古墳時代の中期後半から鎌の主体的な位置を占め、後期になると地域性が顕著になるとされるが、頭部が次第に華奢になる型式変化はほぼ全国的に認められる現象で、それに伴い、範被（のかつぎ、杉山のいう茎間：なかごまち）は直範被（直角範）→台形範被（台形範）



第29図 房総の長頭鎌と伴出土器（抜粋）

→棘範被（棘間）へと変化する。

第29図は房総における古墳出土長頸鎌を、鐵鎌が豊富な木更津市域の資料を上記変遷觀に従って縦列に並べ、同一古墳出土の須恵器を参考として横に掲載したものに、本例に関わる市原市中永谷1号墳・成東町駄ノ塚古墳例を加えたものである。

岩名5号墳例は範被部分の破片にいずれも棘状突起が認められる。また、棘範被の長頸鎌にみられる多様な鎌身のうち、鎌身幅が頭幅より明確に広く、間に逆刺をもたせたり、間を直角に切ったものではなく、本例はいずれも片丸両刃の鎌身で、幅は頭幅とほとんど変わらず、鋸や鑿のように間が不明瞭なものである。これは棘範被の長頸鎌の中でも古相の鎌群（Ⅲ段階）には含まれない要素である。したがって、古墳時代の長頸鎌として最新段階（Ⅳ段階）の鎌群に位置づけられる。TK-217型式併行期以降とみられる墳頂出土の須恵器片が、本鎌群の副葬時期に伴うと考えて、類例との矛盾はない。実年代でいえば確實に7世紀代であり、それも中葉以降の公算が大きいと考える。

第4節 総括

岩名古墳群は、岩名町前遺跡のような弥生時代以来の伝統的な集落に隣接して築かれた古墳群である。

年代の目安を示すと、4世紀代に土器棺や小規模方墳等が造営され、4世紀末～5世紀初頭に3号墳（方墳：14m、低墳丘）、5世紀前葉～中葉に2号墳（方墳：24m）、5世紀後葉～6世紀前葉に4号墳（円墳：21m、低墳丘）が築かれた。この間、隣接して小規模の円墳や土坑墓、追加埋葬施設が築かれた。その後しばらく痕跡が分からなくなるが、7世紀中葉ごろ、再び5号墳（円墳：21m）が築かれる。

上記のうち、今回は最も古く營まれた土器棺と、最も新しく造営された古墳2基を報告した。

4号墳の墳丘下土器棺は古墳時代前期の稀有な例で、ガラス玉も出土した。弥生時代以来の伝統的墓制であるのか否かがこれからの課題であるが、本報告では伝統的な面を強調した。

4号墳は中期末～後期前葉の築造である。時期や位置関係からみて、2号墳と3号墳を受け継いで築造されたとみられ、小さながらも首長墓の系譜に連なるものと認識される。比較的低墳丘であるが、中・近世に方形の高塚として再整形を受けた。その後は近代まで、5号墳と共に塚として利用された。

5号墳は、現状では4号墳との間に空白期間をおいて、突然に築かれる終末期古墳で、高い墳丘を有し、墳頂に筑波石の板石組石棺を有する点は、いわゆる「変則的古墳」とは一線を画す、常総地域では稀有な発掘例である。この特異性は、印旛沼北東部の栄町竜角寺古墳群と対比すべき要素がある。

全国的には前方後円墳が築かれなくなる7世紀代に、最大の前方後円墳として築かれた竜角寺浅間山古墳、その次に当時の大王墓を凌ぐ方墳として築かれた岩屋古墳は、規模や墳形に復古的ともいえる異質な側面がある。前者は筑波石の板石組横穴式石室を有し、後者は貝化石を含む切石横穴式石室2基にわざわざ筑波石を加えて、天井石と棺の仕切に用いている。横穴式石室への筑波石使用例は房総では珍しく、茨城県側とのとりわけ太い関係をもった首長墓である。岩名5号墳の築造時期はこれらと重なる。

岩名古墳群は古くからの伝統的な地域集團により形成され、ごく限られた場合にのみ高い墳丘をもつ古墳を築いた。地域最大の山崎ひょうたん塚古墳がやや離れた場所に築かれることから、中心的役割を担った集團の墓域とは考えにくい面がある。その場所に、7世紀に入って再び古墳が築かれるのは、古墳の特異性からみて、同じころに歴史の渦の中心へと突然に踊りでた竜角寺古墳群の集團と、歩調を共にしていった可能性がある。周辺遺跡のさらなる究明が待たれるところである。

- 注1 酒井弘志はか 2001 『千葉県佐倉市岩名古墳群（2号墳・3号墳）－老人福祉施設設置に伴う埋蔵文化財調査－』 財団法人印旛都市文化財センター
- 2 石倉亮治・黒沢崇 2004 『佐倉印西線（緊急地方道路整備）埋蔵文化財調査報告書－佐倉市岩名町前遺跡－』 財団法人千葉県文化財センター
- 3 草刈古墳群土器幅年と五領式の関係、及び和泉式の位置づけについては、下記を参照していただきたい。
田中 裕 2002 「五領式から和泉式への転換と中期古墳の成立」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11
- 4 1. 墳頂部は大きく削平されている。2. 調査前の墳丘測量図において、1の削平面に長方形の陥没がすでに認められる。3. 2の陥没部分に2号墳主体部が位置、方向、規模、形態のいずれも一致する。4. 盗掘等により複数回掘り込まれた場合に生じる壊込みのズレが観察されず、重複を想定できない。5. 覆土上部が現代のゴミを含むしまりのない層で、焼け炭等の痕跡がみられ、下部では棺などの被覆や裏込めと想定しうる土層は検出されていない。6. 墳丘中心位置からはずれている。7. 古墳の埋葬施設としては類例がほとんどない形態である。8. 出土遺物は認められない。以上、1～5は直接的に現代の土坑であることを示し、4～8は状況として古墳の埋葬施設である可能性が低いことを示す。このように見解を覆さざるをえないが、検証可能な情報を盛り込んだ同報告書の質の高さは賞賛に値する。
- 5 黒沢彰哉 1993 「常総地域における群集墳の一考察－茨城県新治郡千代田町大塚古墳群の分析から－」『婆良岐考古』15 婆良岐考古同人会
- 6 石橋 充 1995 「常総地方における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』6
- 7 市毛 燥 1963 「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』41
- 8 安藤鴻基 1981 「『変則的古墳』雑考」「小台遺跡発掘調査報告書」
- 9 西原崇浩 2002 「高部古墳群I－前期古墳の調査－」千束台遺跡発掘調査報告書IV 木更津市教育委員会
- 10 市毛 燥 1973 「千葉県印旛郡印西町下総鶴塚古墳の調査概報」千葉県教育委員会
- 11 田中 裕はか 2004 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2－八千代市道地遺跡－』 財団法人千葉県文化財センター
- 12 同様の指摘は、加藤修司 2003 「印旛沼周辺地域における方墳の出現と展開－岩名2号墳、3号墳の出現までの概観－」『印旛都市文化財センター研究紀要』3においてもなされている。
- 13 注1と同じ。
- 14 フルイにより1点のみ出土したため、混入の可能性もあると報告されている。
- 15 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鎌について」『樞原考古学研究所論集』8

第1表 土器観察表

遺物名	番号	注記No.	焼成質	器種	溶存度	口径	底径	器高	色調(内外)	実測	備考
4号墳	1	SC-41-006, SC-41-2, SM-001-002-002	土師	杯	50%	16.5	—	5.8	にぶい褐／にぶい褐	周縁1	「前回報告」 第31回40
4号墳	2	SB-14-001	灰窓	甌	5%	—	—	—	灰黄褐／灰黄褐	周縁2	
4号墳	3	SM-001-003	土師	高杯	15%	—	—	—	灰黄褐／灰黄褐にぶい褐	縁10	
4号墳	4	SB-33-031	土師	甌	5%	—	—	—	にぶい褐／灰黄褐	縁8	
4号墳	5	SC-20-001	土師	甌	5%	—	—	—	にぶい赤褐／灰褐	周縁4	
4号墳	6	SM-001-003-004	土師	甌	5%	—	—	—	杯黄褐／黒褐	中央3	
4号墳	7	SM-001-003-0060	土師	甌	5%	—	6.6	—	黒褐／灰褐	中央4	
4号墳	8	SM-001-003	土師	杯	10%	13.0	6.6	—	にぶい赤褐／にぶい赤褐	縁9	
4号墳	9	SB-44-024, SB-23-003	土師	杯	5%	—	—	—	にぶい赤褐／にぶい赤褐	縁6	
4号墳	10	SB-43-014	土師	杯	5%	—	—	—	にぶい褐／にぶい褐	縁7	
4号墳	11	SC-10-001	土師	杯	5%	—	—	—	黒褐／にぶい赤褐	周縁3	
4号墳	12	SB-34-114	瓦質	鉢	5%	—	—	—	にぶい赤褐／にぶい赤褐	縁4	
4号墳	13	SB-31-013	瓦器	盃形	5%	—	—	—	灰黄褐／灰黄褐	縁5	
4号墳	14	前方部-001	磁器	懸利	50%	13.3	45.0	36.8	灰白／灰白	縁1	
4号墳	15	SM-001-003	瓦器	ハッピイ	30%	—	27.5	—	灰褐／灰褐	縁2	
4号墳	16	SM-001-001-0046	陶器	甌	20%	—	28.5	—	暗灰／灰赤	縁3	
(4号墳)											
埴丘下 土器群	1	148, 149, 150, 151, 153, 154, 161, 163, 164, 166, 169, 177	土師	甌	80%	—	8.0	—	にぶい褐／にぶい褐	縁1	
(4号墳) 埴丘下 土器群	2	58-33-62, 63, 65, 66, 69, 72, 73, 74, 77, 78, 79, 80, 85, 86, 88, 89, 90, 91, 93, 95, 96, 98, 103, 105, 107, 115, 122, 126, 131, 132, 134, 135, 1742, 144, 145, 150, 157, 158, 161, 162, 167 SB-43-21, 22	土師	甌	80%	15.3	—	—	にぶい褐／にぶい赤褐	縁2	
(4号墳) 埴丘下 土器群	3	58-33-93, 98, 99, 106, 108, 110, 111, 113, 117, 118, 119, 123, 125, 127, 130, 143, 146, 152 2, 3, 4, 5, 6, 11, 13, 14, 15, 16, 25, 29, 31, 36, 53, 57, 59, 63, 103, 106, 156	土師	甌	50%	—	6.5	—	にぶい赤褐／にぶい赤褐	縁3	
5号墳	1	47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110, 111, 112, 113, 114, 115, 116, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 226, 227, 228, 229, 230, 231, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278, 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 308, 309, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 318, 319, 320, 321, 322, 323, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 330, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 345, 346, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 373, 374, 375, 376, 377, 378, 379, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 387, 388, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 399, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414, 415, 416, 417, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 430, 431, 432, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 440, 441, 442, 443, 444, 445, 446, 447, 448, 449, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 464, 465, 466, 467, 468, 469, 470, 471, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 480, 481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488, 489, 490, 491, 492, 493, 494, 495, 496, 497, 498, 499, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 506, 507, 508, 509, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 516, 517, 518, 519, 520, 521, 522, 523, 524, 525, 526, 527, 528, 529, 530, 531, 532, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 539, 540, 541, 542, 543, 544, 545, 546, 547, 548, 549, 550, 551, 552, 553, 554, 555, 556, 557, 558, 559, 560, 561, 562, 563, 564, 565, 566, 567, 568, 569, 570, 571, 572, 573, 574, 575, 576, 577, 578, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 585, 586, 587, 588, 589, 590, 591, 592, 593, 594, 595, 596, 597, 598, 599, 600, 601, 602, 603, 604, 605, 606, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 613, 614, 615, 616, 617, 618, 619, 620, 621, 622, 623, 624, 625, 626, 627, 628, 629, 630, 631, 632, 633, 634, 635, 636, 637, 638, 639, 640, 641, 642, 643, 644, 645, 646, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 653, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 660, 661, 662, 663, 664, 665, 666, 667, 668, 669, 670, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678, 679, 680, 681, 682, 683, 684, 685, 686, 687, 688, 689, 690, 691, 692, 693, 694, 695, 696, 697, 698, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705, 706, 707, 708, 709, 710, 711, 712, 713, 714, 715, 716, 717, 718, 719, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726, 727, 728, 729, 730, 731, 732, 733, 734, 735, 736, 737, 738, 739, 740, 741, 742, 743, 744, 745, 746, 747, 748, 749, 750, 751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758, 759, 760, 761, 762, 763, 764, 765, 766, 767, 768, 769, 770, 771, 772, 773, 774, 775, 776, 777, 778, 779, 780, 781, 782, 783, 784, 785, 786, 787, 788, 789, 790, 791, 792, 793, 794, 795, 796, 797, 798, 799, 800, 801, 802, 803, 804, 805, 806, 807, 808, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837, 838, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845, 846, 847, 848, 849, 850, 851, 852, 853, 854, 855, 856, 857, 858, 859, 860, 861, 862, 863, 864, 865, 866, 867, 868, 869, 870, 871, 872, 873, 874, 875, 876, 877, 878, 879, 880, 881, 882, 883, 884, 885, 886, 887, 888, 889, 890, 891, 892, 893, 894, 895, 896, 897, 898, 899, 900, 901, 902, 903, 904, 905, 906, 907, 908, 909, 910, 911, 912, 913, 914, 915, 916, 917, 918, 919, 920, 921, 922, 923, 924, 925, 926, 927, 928, 929, 930, 931, 932, 933, 934, 935, 936, 937, 938, 939, 940, 941, 942, 943, 944, 945, 946, 947, 948, 949, 950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 960, 961, 962, 963, 964, 965, 966, 967, 968, 969, 970, 971, 972, 973, 974, 975, 976, 977, 978, 979, 980, 981, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988, 989, 990, 991, 992, 993, 994, 995, 996, 997, 998, 999, 1000, 1001, 1002, 1003, 1004, 1005, 1006, 1007, 1008, 1009, 1010, 1011, 1012, 1013, 1014, 1015, 1016, 1017, 1018, 1019, 1020, 1021, 1022, 1023, 1024, 1025, 1026, 1027, 1028, 1029, 1030, 1031, 1032, 1033, 1034, 1035, 1036, 1037, 1038, 1039, 1040, 1041, 1042, 1043, 1044, 1045, 1046, 1047, 1048, 1049, 1050, 1051, 1052, 1053, 1054, 1055, 1056, 1057, 1058, 1059, 1060, 1061, 1062, 1063, 1064, 1065, 1066, 1067, 1068, 1069, 1070, 1071, 1072, 1073, 1074, 1075, 1076, 1077, 1078, 1079, 1080, 1081, 1082, 1083, 1084, 1085, 1086, 1087, 1088, 1089, 1090, 1091, 1092, 1093, 1094, 1095, 1096, 1097, 1098, 1099, 1100, 1101, 1102, 1103, 1104, 1105, 1106, 1107, 1108, 1109, 1110, 1111, 1112, 1113, 1114, 1115, 1116, 1117, 1118, 1119, 1120, 1121, 1122, 1123, 1124, 1125, 1126, 1127, 1128, 1129, 1130, 1131, 1132, 1133, 1134, 1135, 1136, 1137, 1138, 1139, 1140, 1141, 1142, 1143, 1144, 1145, 1146, 1147, 1148, 1149, 1150, 1151, 1152, 1153, 1154, 1155, 1156, 1157, 1158, 1159, 1160, 1161, 1162, 1163, 1164, 1165, 1166, 1167, 1168, 1169, 1170, 1171, 1172, 1173, 1174, 1175, 1176, 1177, 1178, 1179, 1180, 1181, 1182, 1183, 1184, 1185, 1186, 1187, 1188, 1189, 1190, 1191, 1192, 1193, 1194, 1195, 1196, 1197, 1198, 1199, 1200, 1201, 1202, 1203, 1204, 1205, 1206, 1207, 1208, 1209, 1210, 1211, 1212, 1213, 1214, 1215, 1216, 1217, 1218, 1219, 1220, 1221, 1222, 1223, 1224, 1225, 1226, 1227, 1228, 1229, 1230, 1231, 1232, 1233, 1234, 1235, 1236, 1237, 1238, 1239, 12310, 12311, 12312, 12313, 12314, 12315, 12316, 12317, 12318, 12319, 12320, 12321, 12322, 12323, 12324, 12325, 12326, 12327, 12328, 12329, 12330, 12331, 12332, 12333, 12334, 12335, 12336, 12337, 12338, 12339, 123310, 123311, 123312, 123313, 123314, 123315, 123316, 123317, 123318, 123319, 123320, 123321, 123322, 123323, 123324, 123325, 123326, 123327, 123328, 123329, 123330, 123331, 123332, 123333, 123334, 123335, 123336, 123337, 123338, 123339, 1233310, 1233311, 1233312, 1233313, 1233314, 1233315, 1233316, 1233317, 1233318, 1233319, 1233320, 1233321, 1233322, 1233323, 1233324, 1233325, 1233326, 1233327, 1233328, 1233329, 1233330, 1233331, 1233332, 1233333, 1233334, 1233335, 1233336, 1233337, 1233338, 1233339, 12333310, 12333311, 12333312, 12333313, 12333314, 12333315, 12333316, 12333317, 12333318, 12333319, 12333320, 12333321, 12333322, 12333323, 12333324, 12333325, 12333326, 12333327, 12333328, 12333329, 12333330, 12333331, 12333332, 12333333, 12333334, 12333335, 12333336, 12333337, 12333338, 12333339, 123333310, 123333311, 123333312, 123333313, 123333314, 123333315, 123333316, 123333317, 123333318, 123333319, 123333320, 123333321, 123333322, 123333323, 123333324, 123333325, 123333326, 123333327, 123333328, 123333329, 123333330, 123333331, 123333332, 123333333, 123333334, 123333335, 123333336, 123333337, 123333338, 123333339, 1233333310, 1233333311, 1233333312, 1233333313, 1233333314, 1233333315, 1233333316, 1233333317, 1233333318, 1233333319, 1233333320, 1233333321, 1233333322, 1233333323, 1233333324, 1233333325, 1233333326, 1233333327, 1233333328, 1233333329, 1233333330, 1233333331, 1233333332, 1233333333, 1233333334, 1233333335, 1233333336, 1233333337, 1233333338, 1233333339, 12333333310, 12333333311, 12333333312, 12333333313, 12333333314, 12333333315, 12333333316, 12333333317, 12333333318, 12333333319, 12333333320, 12333333321, 12333333322, 12333333323, 12333333324, 12333333325, 12333333326, 12333333327, 12333333328, 12333333329, 12333333330, 12333333331, 12333333332, 12333333333, 12333333334, 12333333335, 12333333336, 12333333337, 12333333338, 12333333339, 123333333310, 123333333311, 123333333312, 123333333313, 123333333314, 123333333315, 123333333316, 123333333317, 123333333318, 123333333319, 123333333320, 123333333321, 123333333322, 123333333323, 123333333324, 123333333325, 123333333326, 123333333327, 123333333328, 123333333329, 123333333330, 123333333331, 123333333332, 123333333333, 123333333334, 123333333335, 123333333336, 123333333337, 123333333338, 123333333339, 1233333333310, 1233333333311, 1233333333312, 1233333333313, 1233333333314									

第2表 金属製品計測表

遺物名	番号	注記No.	出土位置	材質	断面	長さ	重量	備考
5号墳	8	131	墳頂	鉄	鉄錠	1.5	0.8	
5号墳	9	115	墳頂	鉄	鉄錠	2.7	1.8	第二施設部
5号墳	10	64	墳頂	鉄	鉄錠	1.5	0.8	
5号墳	11	159	墳頂	鉄	鉄錠	2.9	2.7	鐵身體
5号墳	12	140, 141	墳頂	鉄	鉄錠	3.6	3.0	
5号墳	13	1	SK015	鉄	鉄錠	4.3	4.4	
5号墳	14	112, 114	墳頂	鉄	鉄錠	9.2	9.7	
5号墳	15	145	墳頂	鉄	鉄錠	2.2	0.7	
5号墳	16	132	墳頂	鉄	鉄錠	5.9	5.4	頭部
5号墳	17	75	墳頂	鉄	鉄錠	2.8	3.1	
5号墳	18	43	墳頂	鉄	鉄錠	1.8	1.4	
5号墳	19	65	墳頂	鉄	鉄錠	1.2	0.6	
5号墳	20	148	墳頂	鉄	鉄錠	1.7	0.8	
5号墳	21	160	墳頂	鉄	鉄錠	1.8	1.2	
5号墳	22	176	墳頂	鉄	鉄錠	0.8	0.6	
5号墳	23	151	墳頂	鉄	刀子	2.1	1.0	
5号墳	24	66	墳頂	鉄	刀子	1.3	0.8	
5号墳	25	33	墳頂	鉄	刀子	2.4	3.0	
5号墳	26	79	墳頂	鉄	刀子	3.2	4.9	
5号墳	27	67, 100	墳頂	鉄	刀子	6.0	8.4	
5号墳	28	13	周溝	鉄	刀子	4.1	4.7	
5号墳	29	46	周溝	銅	鋼錠	2.3	1.6	新糸水
5号墳	30	34	周溝	鉄	鉄錠	2.5	2.6	寛永通宝
5号墳	31	3	盛土内	銅	キル	49.72	26.2	
5号墳	16	周溝	鉄	鉄	—	1.4	0.7	
5号墳	124	墳頂	鉄	鉄片	—	1.5	0.3	
5号墳	1	墳頂	鉄	錐	—	1.5	0.9	第二施設
5号墳	41	周溝	銅	錐状金具	—	—	—	

第3表 玉類計測表

遺物名	番号	注記No.	名称	材質	遺存度	径	高	孔径	色調	実測	備考
4号墳中央施設	1	SM-001-003-67	白玉	蛇紋岩	100	5.0	2.8	2.0	暗い灰みの青	中央1	
4号墳中央施設	2	SM-001-003	白玉	蛇紋岩	100	4.5	2.0	2.0	暗い灰みの青	中央2	
4号墳丘下土器棺	4	SB-33-172	小玉	ガラス	100	5.5	4.8	2.0	に赤い緑みの青	棺4	
4号墳丘下土器棺	5	SB-33-174	小玉	ガラス	100	5.5	4.2	2.0	さえた青緑	棺5	透明
4号墳丘下土器棺	6	SB-33-175	小玉	ガラス	100	4.5	5.2	1.5	に赤い緑みの青	棺6	
4号墳丘下土器棺	7	SB-33-176	小玉	ガラス	60	—	4.0	(2.0)	さえた青緑	棺7	薄緑

第4表 繩文土器観察表

遺物名	番号	注記No.	構成質	器種	遺存度	色調(内/外)	実測	備考
4号墳	1	SB-44-030	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周1	
4号墳	2	SB-12-007	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周2	
4号墳	3	SM-001-004	良好	甕	5%	に赤い青緑/青緑	周3	
4号墳	4	SC-20-011	良好	漆鉢	5%	灰褐色/に赤い青緑	周4	
4号墳	5	SB-33-034	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周5	
4号墳	6	SB-34-012	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周6	
4号墳	7	SM-001-004	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周7	
4号墳	8	SM-001-005,	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周8	
4号墳	9	SM-001-009	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周9	
4号墳	10	SC-30-004	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周10	
4号墳	11	SM-001-009	良好	甕	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周11	
4号墳	12	SM-001-004	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周12	
4号墳	13	SM-001-001,	良好	甕	5%	褐色/に赤い黄緑	周13	
4号墳		SM-001-009, SB-22-020						
5号墳	14	23	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周5	
5号墳	15	2, 19	良好	漆鉢	5%	灰褐色/灰褐色	周3, 4	
5号墳	16	12, 6, 8	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周1	
5号墳	17	2, 10, 20, 21, 22, 23	良好	漆鉢	5%	に赤い青緑/に赤い青緑	周2-1, 2-2	

付章 千葉県佐倉市岩名4号墳 墳丘下土器棺

出土のガラス玉材質分析

(有) 武藏野文化財修復研究所 小泉好延

1はじめに

日本に於けるガラスの出土は弥生時代からである。藤田等¹⁾は考古学的立場から弥生時代の出土ガラスを中心として、ガラスの形態、用途などによる分類別に、管玉・丸玉・小玉・切り子玉などガラス玉の形態や加飾による詳細な分類と徹底的な観察分析を行った。また、遺跡報告書に掲載されたガラス材質についても検討を加え、ガラス原料、鋳型などの考察を行った。筆者らも関東を中心に、東日本の弥生時代、あるいは古墳時代の遺跡から出土したガラス玉の材質、基礎ガラス、着色剤などについて分析を進め、多量のデータ蓄積から、弥生時代の遺跡から出土するガラス玉材質がカリ石灰ガラスであり、また、古墳時代前期遺跡の出土物も同様であることを報告してきた²⁾⁻¹⁰⁾。肥塚隆保らは近畿を中心に日本各地の同時代におけるガラス材質の分析研究を進め、この時代の遺跡から出土するガラス玉材質はカリ石灰ガラスが多いとの報告を行っている¹¹⁾。

本試料は東日本では事例の少ない古墳時代前期遺跡からの出土であることから、貴重な分析となろう。

2 分析方法と試料の前処理

(1) 分析方法

筆者は非破壊分析法であるPIXE分析法を用いて、考古学試料、ガラス、金属、陶磁器などの材質分析を行ってきた。本分析もPIXE法によって行った。

PIXE分析法（荷電粒子励起X線分析、PartlcleInducedX-rayEmission）は、加速器によって陽子や α 粒子を高エネルギーに加速し、分析試料に照射し、試料の含有元素から発生する特性X線のエネルギースペクトルを半導体型放射線検出器で測定する、多元素を同時に分析する方法である。X線検出は高純度Si半導体検出器とCZT半導体検出器の両者を使用し、特性X線エネルギースペクトル（PIXEスペクトル）の解析から元素同定と定量を行った。

(2) 試料処理と分析条件

試料は表面の汚れを除去するために、超音波器を用い、蒸留水・エタノール溶液内で分間の洗浄を行っている。照射エネルギーと粒子は3MeVのプロトン、照射ビーム径は0.5mm、照射電流値、0.5~1ナアンペア(nA)、照射電荷量200~1000ナノクーロン(nC)である。定量に使用した標準試料はNBS 611,621,1411,1412,70a、標準岩石試料（地質調査所）JA1~JG1などである。

3 分析結果と考察

PIXEスペクトルを第30図に、分析結果を第5表に示した。このPIXEスペクトルから解るように、珪素(Si)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)とカリウム(K)、カルシウム(Ca)とマンガン(Mn)、鉄(Fe)、銅(Cu)、鉛(Pb)などが検出された。CZT半導体検出器では錫(Sn)が検出された。

試料は約4ミリメートル径の青色小玉である。試料番号172、174、175は完形で176は3つの破片となっている。試料176の破片は破断面が新鮮であることから、遺跡現場で取り上げる際に破損したものと思われる。各試料の表面は破断面との比較から腐蝕が認められる。試料番号172、174、175は表面部を、試料176は表面部、内部溝部、新鮮断面部を個別に分析した。検出された元素種は同一である。定量化は不定形な試料にため検出された元素の酸化物濃度の合計を100とし、結果を表に示した。この結果によれば、以下のように要約される。

① 基礎ガラスはカリ石灰ガラスである。試料176-2は新鮮な破断面の分析結果であり、製作された当時の成分を示していると思われる。他の分析部は埋蔵環境による腐蝕に影響により、カリ濃度が大きく減少していると思われる。

② 青の着色剤は銅酸化物である。

③ 鉛、錫が検出されたが、それぞれ0.4~0.7重量パーセント(wt%)、0.05~0.12wt%と微量である。基礎ガラスや着色剤として意図して用いられたものではなく、着色剤として使用された銅酸化物が含有していた不純物と思われる。

筆者らは東日本の弥生時代遺跡、古墳時代前期遺跡から出土するガラス玉材質について、カリ石灰ガラスが大部分を占めこと、古墳時代中期、後期になるとソーダ石灰ガラスが増加していくことを示してきた。今回分析した試料は従来報告してきたガラス材質と同様に、カリ石灰ガラスで銅酸化物による着色である。なお、古墳時代前期遺跡出土の分析例を掲げると、東京都大田区宝塚山古墳遺跡(古墳時代前期)出土のガラス玉が紺、青色小玉でいずれもカリ石灰ガラスである。青色の着色剤は1~2wt%の銅酸化物によるもので今回の分析試料と同様である。

最近行った長野県佐久市の弥生時代、古墳時代中期、後期遺構出土物の分析結果も同じ結論である。近畿などの遺跡から出土するガラス材質を分析している肥塙隆保らも同様な傾向にあることを明らかにしている。藤田等が紹介した弥生時代遺跡報告書によれば、九州、中国、出土のアルカリ石灰ガラスでは、佐賀県東山田一本杉遺跡(前期)のソーダ石灰系青色ガラス玉、山口県土井ヶ浜遺跡のカリ石灰系青色ガラス玉などの例が認められ、九州、中国と東日本、近畿などの結論とは異なった様相を示しているように思われる。この時代対馬の箱式石棺からは、東日本では認められない多数の赤茶ガラス玉が出土することから、これらの地域の遺跡から出土するガラスは近畿や東日本とは異なって、多様化しているものと思われる。

注1 藤田等「弥生時代のガラスの研究」名著出版 1994

2 伊藤 彰一「ガラスにおける『炎と色の技術』」アグネ技術センター 1997

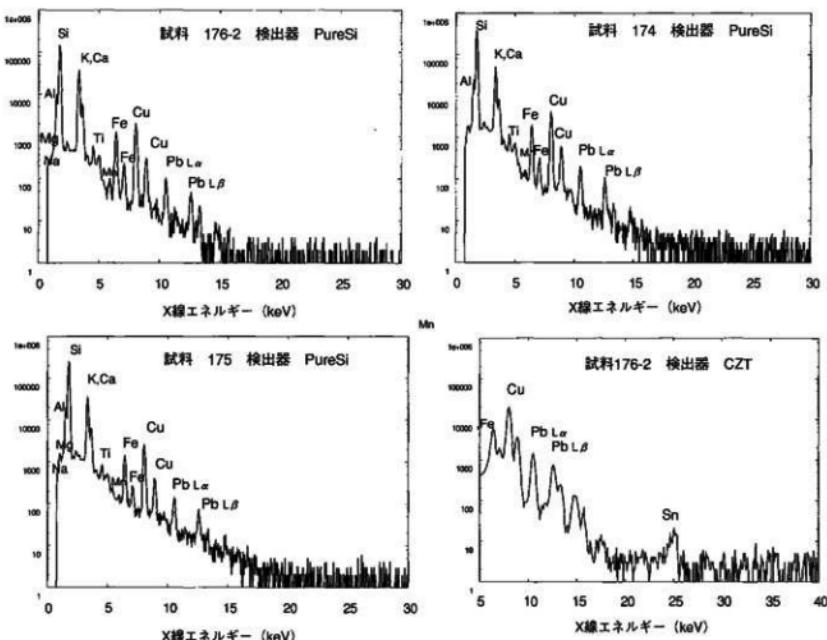
3 小泉好延 小林敏一「宝塚山古墳から出土したガラス玉の材質分」大田区立郷土博物館紀要 第7号

4 小泉好延 小林敏一「弥生・古墳時代のガラス材質」第一回考古科学シンポジウム 1999 於東京大学、東京大学原子力研究総合センター、アイソトープセンター、埋蔵文化財調査室共催

- 5 原祐一、小泉好延「東京大学本郷構内武田先端知ビル地点出土のガラス玉材質分析」第3回考古科学シンポジウム 2001.12
- 6 長野県佐久市「後家山遺跡発掘報告書」2004
- 7 神奈川県奈良地区受地だいやま遺跡 小泉好延 小林絢一 ガラス玉分析 第一回考古科学シンポジウム 1999
- 8 小泉好延 小林絢一「狸塚27号墳から出土のガラス玉の材質分析」埼玉県江南町埋蔵文化財調査報告書12集 1999.3
- 9 小泉好延 小林絢一「複田遺跡より出土したガラスたまの材質分析」長野県埋蔵文化財センター発掘報告書 1999.3
- 10 小泉好延ら妻木晚田遺跡出土のガラス玉の分析 印刷中
- 11 小泉好延 小林絢一「狸塚27号墳から出土のガラス玉の材質分析」埼玉県江南町埋蔵文化財調査報告書12集 1999.3
- 12 K. Kobayashi,Y. Koizumi C. Nakano, S. Hatori,Y. Sunohara [Dual detector system for PIXE measurement covering a wide element range] Nuclear Instrument and methods 1999 144-149p
- 13 肥塚隆保ら「左坂墳墓群出土のガラス製品の考古科学的研究」奈良文化財研究所「考古科学の総合的研究活動報告書Ⅱ」 2001

第30図 佐倉市岩名4号墳 墳丘下土器棺内出土のガラス玉分析 PIXEスペクトル

計数値



第5表 分析結果

単位 脱酸化物重量パーセント (wt%)

試料番号*	色調・ サイズ	分析 面	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	PbO	ZnO	CoO ₃	SnO ⁺⁺
176-2(7)	青 鏡片	断面 鏡面	n.d.	0.31	4.91	79.6	10.80	0.25	0.12	0.04	1.06	2.24	0.62	n.d.	n.d.	0.05
176-3(7)	青 鏡片	内部 底	n.d.	0.18	4.54	86.6	3.50	0.27	0.15	0.05	1.17	2.70	0.73	n.d.	n.d.	0.10
176-1(7)	青 鏡片	断面 鏡面	n.d.	0.15	4.77	88.9	2.16	0.26	0.14	0.04	0.98	2.05	0.49	n.d.	n.d.	0.12
175(6)	青・ 緑 約4mm	外表面	n.d.	0.20	5.71	84.3	6.27	0.26	0.10	n.d.	0.68	1.75	0.61	n.d.	n.d.	0.10
174(5)	青・ 緑 約4mm	外表面	n.d.	0.15	4.91	85.6	5.73	0.28	0.12	n.d.	0.67	1.89	0.56	n.d.	n.d.	0.10
172(4)	青・ 緑 約4mm	外表面	n.d.	0.13	4.96	88.2	3.52	0.30	n.d.	n.d.	0.70	1.62	0.44	n.d.	n.d.	0.08

* ただし、上記値は不定形名試料にため、検出された元素濃度を100とした。表面が腐蝕した試料も存在する。

** () 内は第12回の番号である。

*** SnO₃はCZT検出器の測定から求めた。

写 真 図 版





岩名 4 号・5 号墳遠景（鹿島川から）



岩名 4 号墳調査前（西から）



岩名 4 号墳調査前（東から）



岩名4号墳全景（南西から）



岩名4号墳全景（上から）



岩名町前遺跡
完掘状況（上から）



岩名 4 号墳墳丘断面（北から）



岩名 4 号墳墳丘断面（南から）



岩名 4 号墳墳丘断面（西から）



岩名 4 号墳南側の高まり断面（西から）



岩名 4 号墳北側周溝断面（西から）



岩名 4 号墳西側周溝断面（北から）



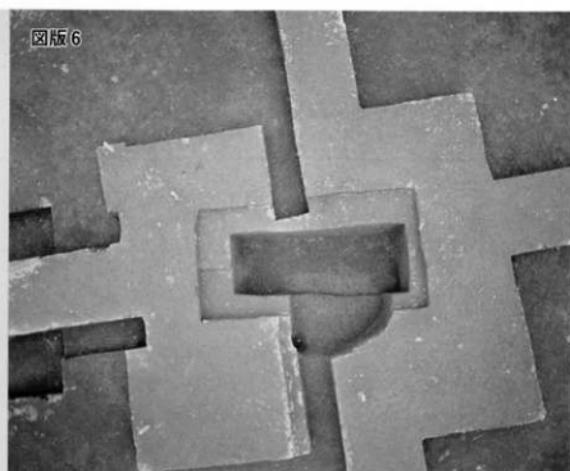
岩名 4 号墳東側周溝断面（北から）



方形周溝状遺構遺物出土状況（南から）



岩名 4 号墳東側周溝内出土遺物〔第 8 図 1〕
（東から）



岩名4号墳中央施設（上から）



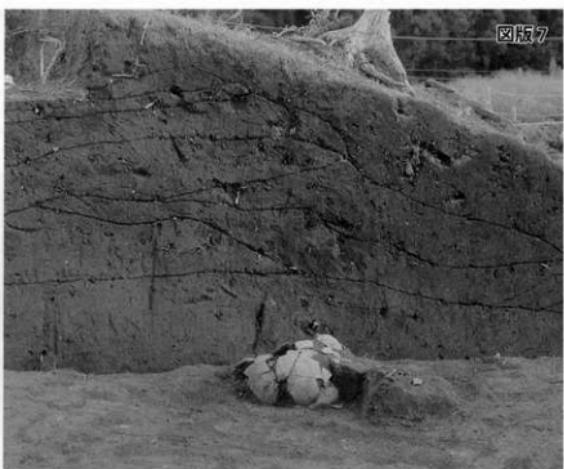
岩名4号墳中央施設断面（西から）



岩名4号墳周溝内施設（南から）



岩名4号墳周溝内施設断面（東から）



岩名4号墳墳丘下土器棺（北から）



岩名4号墳転用塚頂部断面（西から）



岩名4号墳転用塚堅坑内出土遺物（北から）



岩名4号墳転用塚堅坑断面（西から）



岩名 5 号墳（鹿島川から）



岩名 5 号墳調査前（北西から）



岩名 5 号墳覆土除去状況（北北西から）



岩名5号墳全景（北の上方から）



岩名5号墳墳丘（北北西から）



岩名5号墳墳丘盛土断面（北から）



岩名 5 号墳墳丘
北側及び西側断面（北西から）



岩名 5 号墳墳丘
東側及び南側断面（北西から）



岩名 5 号墳C-C' 断面（南西から）



墳頂供獻土器・鉄器出土状況（南東から）



岩名5号墳墳頂覆土除去状況（北西から）



岩名5号墳と埋葬施設（上から）



石棺盗掘坑内断面（東から）



石棺盗掘坑内完掘状況（東から）



石柱と裏込（東から）



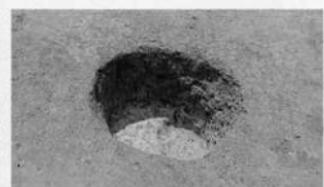
近世の道（西から）



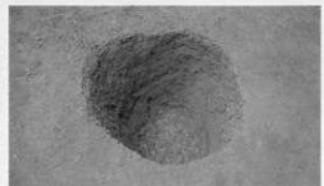
近世土坑全景（上から）



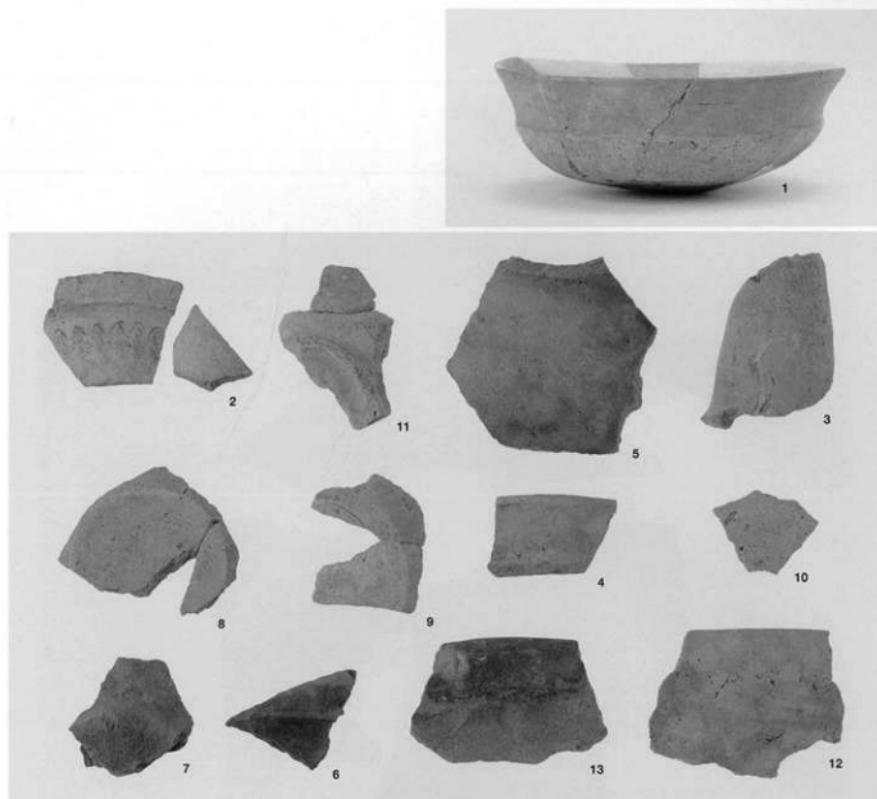
SK019全景（北東から）



SK001（北から）



SK002（北東から）

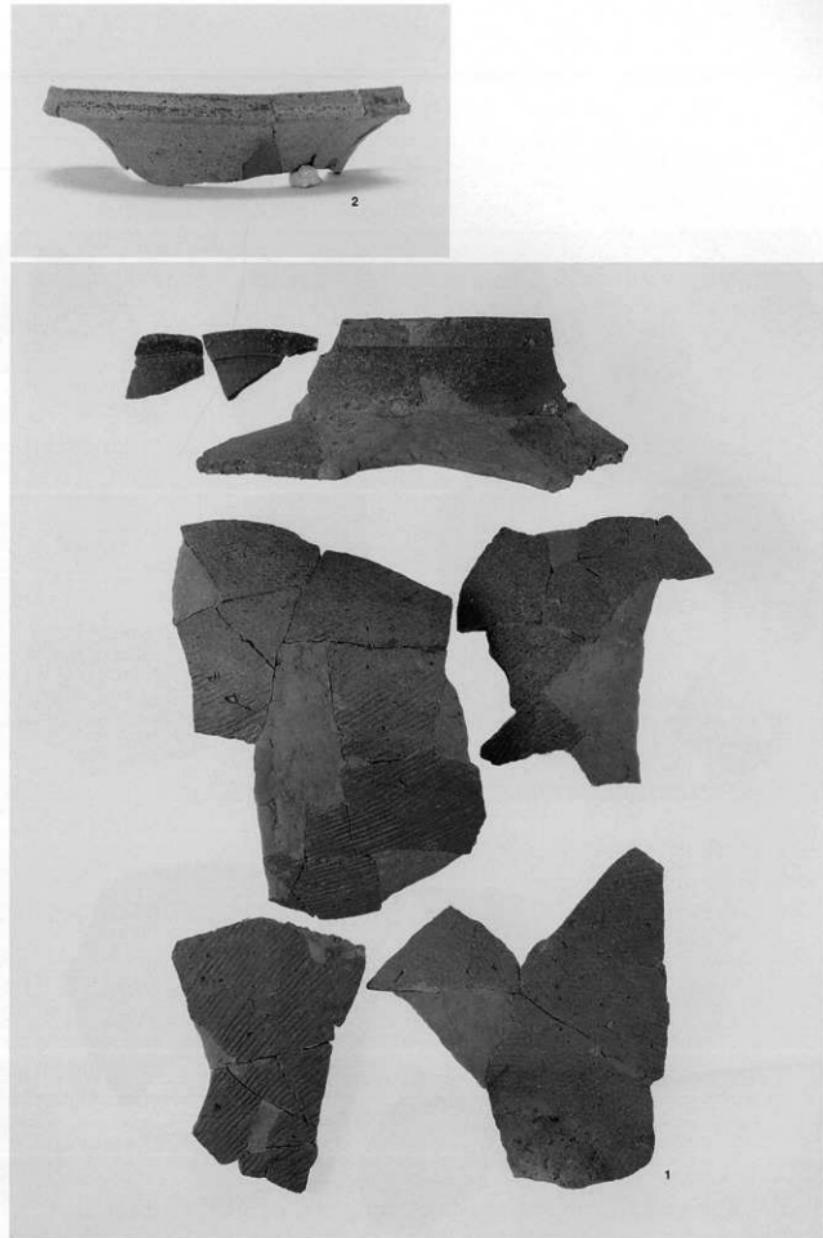


岩名4号墳



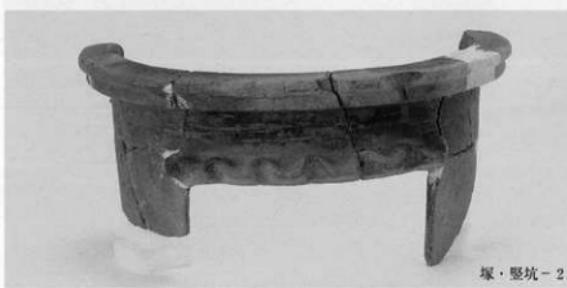
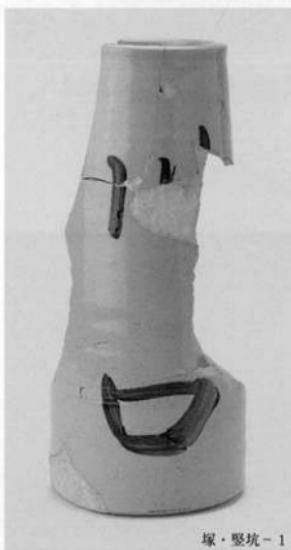
岩名5号墳

岩名古墳群出土土器（1）

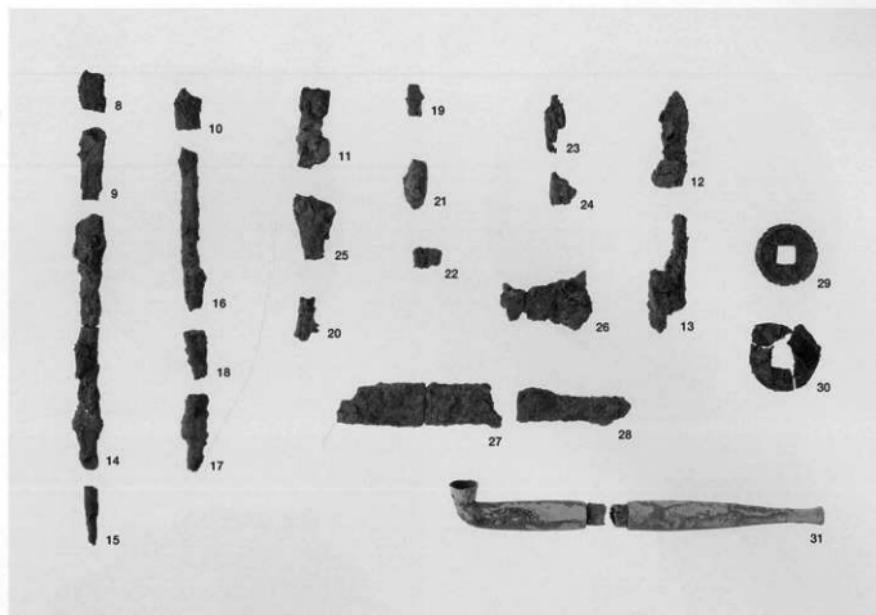


岩名古墳群出土土器（2）

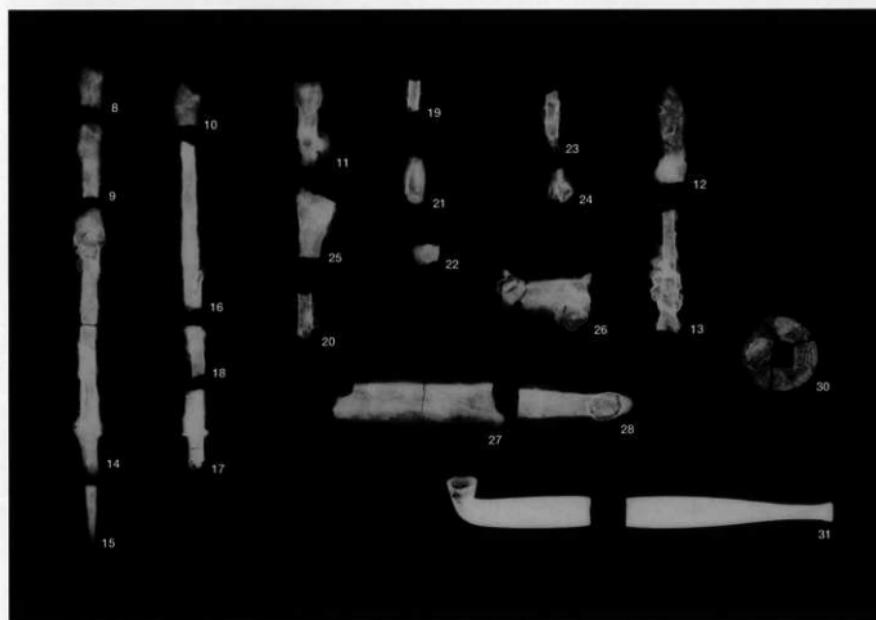
岩名5号墳



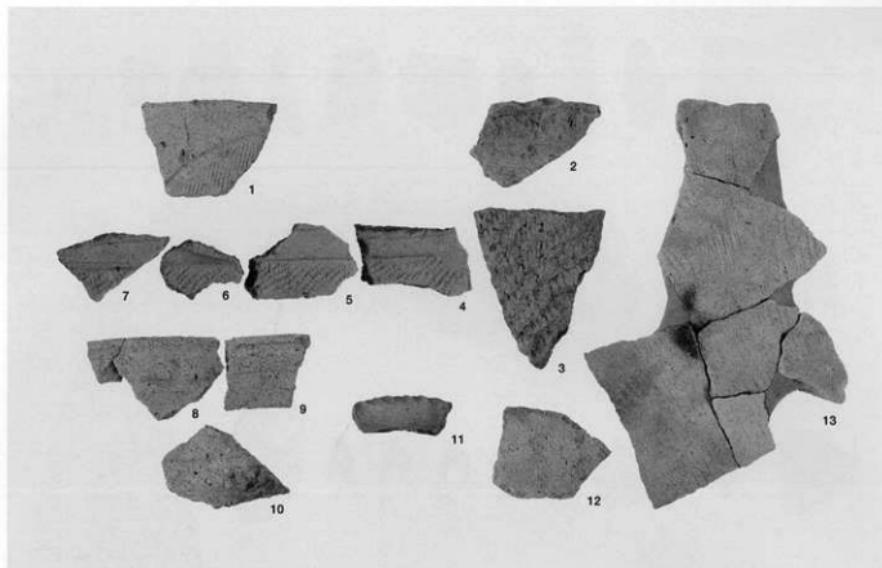
岩名古墳群出土土器（3）



岩名5号墳出土金属製品



岩名5号墳出土金属製品（X線）

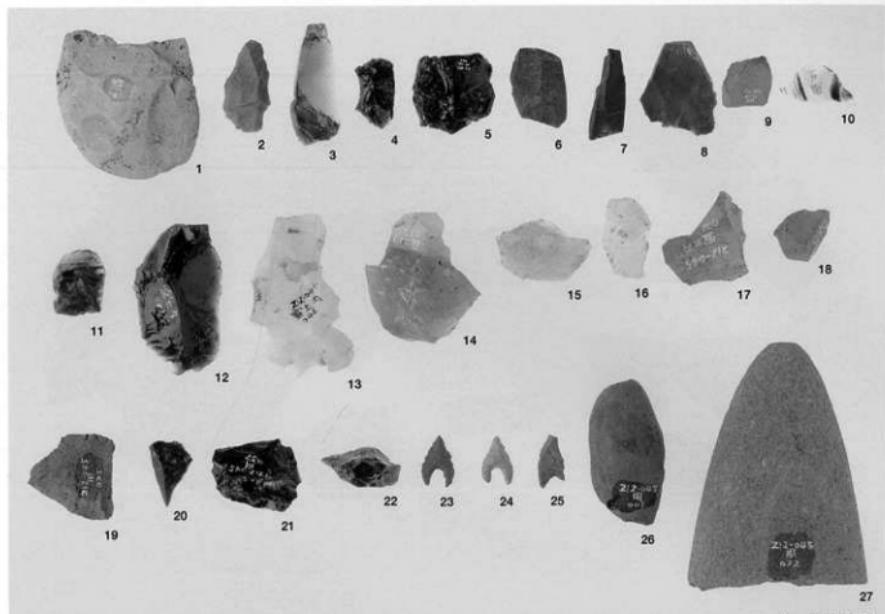


岩名4号墳



岩名5号墳

岩名古墳群出土繩文土器・弥生土器



岩名古墳群出土石器

4・5号墳石器

報告書抄録

ふりがな	さくらいんざいせん (きんきゅううちほうどうろせいひ)まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ2							
書名	佐倉印西線(緊急地方道路整備)埋蔵文化財調査報告書2							
副書名	佐倉市岩名古墳群							
卷次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第520集							
編著者名	田中裕・古内茂							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2				TEL043-422-8811			
発行年月日	西暦 2005年3月25日							
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
岩名町前遺跡 (岩名4号墳)	佐倉市下根 955-1	12212	042	35度 44分 14秒	140度 13分 11秒	20000701～ 20001031	3,800	佐倉印西線の緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財調査
岩名5号墳	佐倉市岩名 954-1	12212	045	35度 44分 10秒	140度 13分 12秒	20030407～ 20030729	870	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
岩名町前遺跡 (岩名4号墳)	古墳	古墳時代 中・近世	円墳 木棺直葬 土器棺 塚(古墳改変) 土坑	1基 2基 1基 1基 1基	副葬品(白玉、ガラス玉),土師器,須恵器,旧石器時代石器,縄文土器(早期～晚期),縄文時代石器,弥生土器(後期),陶器,錢貨	古墳時代前期の土器棺からガラス玉が出土した例と,終末期古墳の墳頂部に箱形石棺が設置されていた例は,ともに県内で初めての調査例である。		
岩名5号墳	古墳	古墳時代後期 中・近世	円墳 箱形石棺 塚(古墳改変) 土坑	1基 1基 1基 17基	副葬品(鉄鎌,刀子),土師器,須恵器,旧石器時代石器,縄文土器(早期・後期・晚期),縄文時代石器,土師器,陶磁器,錢貨			

千葉県文化財センター調査報告第520集
佐倉印西線(緊急地方道路整備)埋蔵文化財調査報告書2
—佐倉市岩名古墳群—

平成17年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
発 行 千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町1-10-6